

実践報告

愛知県祭礼紀行（余寒の巻）

今野 元

<本巻目次>*

27. 御器所八幡宮の慈楽御神湯（2月初旬）
28. 尾張の節分祭（2月初旬）
29. 黒沢田楽（2月第1日曜日）
30. 砥鹿神社の火舞祭（2月7日）
31. 豊橋の鬼祭（2月10・11日）
32. 下之森のオコワ祭（2月11日）
33. 田峯田楽（2月11日）
34. 田峰観音奉納歌舞伎（2月12日）
35. 鳥羽大篝火（2月第2日曜日）
36. 菟足神社の御田祭（旧暦1月7日）
37. 瀧山寺の鬼祭（旧暦1月7日に近い土曜日）

27. 御器所八幡宮の慈楽御神湯（2月初旬）

愛知郡（愛智郡）御器所（ごきそ）村は、豊臣秀吉の母なか（大政所）の生地だとされる。今日は名古屋市に含まれているが、土蔵や古い日本家屋が昔の風情を残している（図75）。名古屋市地下鉄鶴舞線荒畑駅の南には、なかの生家跡があり、小さな祠と共に説明版が立てられている。なかは持萩中納言の娘だったという逸話と、その持萩中納言の御所がここにあったという逸話とが結びついて、ここでなかが生まれたという逸話が生じたというが、その真偽のほどは明らかではない。御器所はまた、織田信長の部将として知られる佐久間氏の本拠地でもあり、佐久間盛政は御器所西城主から金沢城主になったが、柴田勝家側で賤ヶ岳の戦いに加わり、羽柴秀吉側の中川清秀を打ち取ったのち、秀吉への服従を拒んで成敗されたという。



図75 御器所の街並み（平成26年2月3日）

* 拙稿「愛知県祭礼紀行」は、令和3年3月に『共生の文化研究』で連載が開始されたが（<http://doi.org/10.15088/00004617>）、2回目の今回から『人文社会論叢』に掲載先を移すことになった。

御器所八幡宮では、節分の日の朝に慈楽御神湯と呼ばれる湯立神事が行われる。これは「金の湯」とも呼ばれ、神職が大釜で沸かした金粉入りの湯を参詣者に分けるという行事である。

荒畑駅には朝8時前に着いた。古い住居のなかを進むと、御器所八幡宮の森が見えてくる。正面には「八所明神 御器所八幡宮」、「郷社 八幡神社」との社標があり、



図77 慈楽御神湯の開始（平成26年2月3日）

「佐久間美作守・徳川家康公必勝祈願所」との宣伝版もある。こぢんまりとした森に、

様々なものが建っている。鳥居、蕃塀、本殿は朱塗だが、拝殿、神楽殿は白木造である。社叢にはまだ人氣が少ない。朱塗

の摂社・御器所天満宮に向かってやや右に、大きな五徳の上に大釜が置かれ、すでに焚火がなされ、木の蓋がされている。その前には、すでに神饌が備えられている。蕃塀のところでは、直会の御神酒の準備がなされている（図76）。境内の社伝によれば、御器所という地名は、熱田神宮で用いる土器を製作したためであるという。

8時半、神職が勢ぞろいして神事が始まった（図77）。



図79 「金の湯」の分配（平成26年2月3日）

集まった参詣者は20人ほどで、中高年の女性が多く、みな水筒を手にしている。祝詞奏上

ののち、木蓋が開けられ、神職によって最初一杯が神前に供えられた（図78）。続いて参詣者が一列になり、手伝いの婦人から黄金の柄杓で水筒あるいは紙コップに、大釜から「金の湯」が分けられた。近づいて分かったが、大釜一杯に水が入っているのではなく、

その中の鍋に湯が入っているのだった。金箔の大小の破片が多数入っており、一杯もらった紙コップにも破片が多くついていた（図79）。

御器所八幡宮では、同日このあと13時半より福豆撒き、菓子撒きがあるというが、ここで同宮を離れて甚目寺に向かった。



図76 御器所八幡宮の境内（平成26年2月3日）



図78 御神湯の神前奉納（平成26年2月3日）

28. 尾張の節分祭（2月初旬）

甚目寺観音、大須観音、笠寺観音では、特設の舞台が設けられ、大豆を播く光景が見られる。



図80 甚目寺観音（鳳凰山甚目寺）仁王門（平成26年2月3日）

この門は、駅の方から来る参詣客のための新しいもので、甚目寺の仁王門は別なところに立っている（図80）。門をくぐる

と、境内には多くの露店が設けられている。並んでいるのは、福豆、願かけ振り太鼓、愛染明王奉納ひしゃく、鬼まんじゅう、苺大福、麩まんじゅう、草餅、さくら餅、三色まんじゅうといったものである（図



図82 甚目寺観音の豆撒き（平成26年2月3日）

81）。本堂前には大きな台が設けられ、青い袴を着た男たちが日の丸の扇で合図をすること

に、なかにいる橙の羽織の信徒（多くが女性）が「福は内」、

「福は内」の掛け声に合わせて豆を撒き、それを下にいる参詣者が浴びるということが繰り返されていた（図82）。本堂前の参道を進むと、五色の幕を張った仁王門が見えてくる。境内の「甚目寺誌略」によると、寺の創建は西暦597年だといひ、天智天皇の勅願寺となり、天武天皇から「鳳凰山」の勅額を下賜され、源頼朝が仁王門を建立し、豊臣秀吉や徳川義直から寺領を寄進されたという。菓子屋で、餡入り恵比寿大黒を買った（図83）。

大須観音に到着したのは、13時前だった。ここでも朱塗の本堂の前に舞台が設置され、そこから様々な恰好の人々が福豆を撒いている。やはり袴を着た男たちが日の丸の扇で合図をし、掛け声は「福は内」である。境内では、「福笹」という笹に柗と大判をつけたお土産を売っている。境内にはまた、白牛に乗った徳川宗春のからくり人形があった。大須商店街を福の神や七福神に扮した人々が練り歩き、舞台に上って豆を撒いた。福の神になるのはとりわけ名誉と見えて、大きく名前が書いてある。福



図81 甚目寺観音の振り太鼓とひしゃく（平成26年2月3日）



図83 甚目寺観音の餡入り恵比寿大黒（平成26年2月3日）

の神は、赤鬼、青鬼と一緒に登場し、豆を撒いた。人々が豆を撒く表情が生き生きとしている（図84）。



図84 大須観音の鬼と福の神（平成26年2月3日）

そののち笠寺観音（天林山笠覆寺）に移った。笠寺には住宅と接近して、白山大権現や観音堂が建っている。十一面観音を祀る観音堂前の赤門に鬼の姿を描いた絵馬が掲げられ、それをくぐると堂の軒先におかめの面の絵馬が掲げられている（図85）。その下を参詣者は進んでいくのである。境内では、やはり福豆や福笹が販売されていた（図86）。

では、参詣者が自ら豪華な追儺羽織や打掛を身にまとって豆撒きをするという行事が行われる。このため田園のなかにもかかわらず、多くの参詣者がある。当日配布の説明によると、元来この行事は、昭和初期に託児所のもので始まったが、徐々に集落の人々が参加して、衣装を持ち寄って盛大になっていき、戦争で中断したが、戦後に復活して今日に至るとい



図85 笠寺観音の鬼とおかめの絵馬（平成26年2月3日）

名鉄常滑線の新舞子駅に着くと、無料タクシーが次々やってきました。大智院への道のりは、

自動車で10分あまりである。集落の一角で降ろされ、住宅地のなかに入っていった。向こうから割烹着の老婦人2人が、大きな空の櫃をもって帰ってくる。更に進んでいくと、幾つかの露店があり、大智院の山門に行き着いた。



図86 笠寺観音の縁起物（平成26年2月3日）

大智院は真言宗智山派に属する。その開基は聖徳太子といわれ、本尊は聖観世音菩薩だが、前立馬頭観世音菩薩も安置している。大智院は、広く「めがね弘法」の愛称で知られている。これは、この寺に安置されている「身代大師」が、盲人用の黒眼



図 87 大智院の鬼（平成 28 年 2 月 3 日）

ち寄った伊豫國浅吉という盲目の老翁が、この「身代大師」に一心にすぎたところ、目が見えるようになり、その代わりに「身代大師」の左目が傷ついたという。この浅吉が大師に自分の眼鏡をかけさせたことから、「めがね弘法」と呼ばれているのである。いわばお賓頭盧さんと同じだろう。

境内は多くの人々で賑わっている。境内の露店では恵方巻やいろいろが販売されている。本堂ではまさに豆撒きが行われるところであった。多くの参詣者が左手から本堂に入ってくる。衣装は追儼羽織が圧倒的に多い。追儼羽織は豪華な錦の陣羽織で、打掛は振袖である。護摩が焚かれ、最後に人々は堂内に向かい「福は内」と叫び、本堂入口にいる赤鬼、青鬼に向かって「鬼は外」と叫んで、豆を撒くのである（図 87）。

この豆撒きに参加するためには、納経所の右奥にある玄関でお布施を奉納する必要がある。



図 89 大智院住職の説法（平成 28 年 2 月 3 日）

行われていたので、味噌汁をおかわりしてみた。食事が終わり、更に奥に進むと、再び受付があり、そこで名前や住所を書き入れる用紙を渡される。更に進むと、やや新しい広間があり、そこが本堂に至る第二控となっている。ここにまた受付があり、先ほどもらった用紙に書き入れたものを提出した。ここで集まった人々を見渡したところ、参詣者の八割以上が女性であり、年輩者が多いという印象を受けた。しばらくすると本堂横の第一控に移った。ここで係員から説明があり、追儼羽織や打掛が配られ

鏡をかけているためである。「身代大師」とは弘法大師の座像で、弘法大師が知多巡錫のとき、大智院に立ち寄って「我を帰依する者、一切の罪を消滅し、諸の有情を安樂しらしめ、業病難病を解脱す、福力常具足し、穀麦財宝ことごとく皆の意の如く得せしめ、悪業煩惱の心を開眼せしむべし」と述べて、自らの尊像を残したものだとされている。安政 7 年（西暦 1860 年）旧 3 月 21 日、偶々立



図 88 大智院の接待（平成 28 年 2 月 3 日）

2800 円を納めてなかに入ると、右手の建物では盛大に振舞が行われていた。土間のある古い広間で、多くの参詣者がぎっしり座って振舞を受け、割烹着の婦人連が奔走している。振舞われているのは、白米、赤味噌汁、沢庵漬である（図 88）。私が座ったちゃぶ台では、他に 3 人の老婦人が食事をしていた。「おかわりなさいよ」と言われたので、「地元の方ですか」と聞いたところ、他地域からの参詣者だということだった。実際おかわりは盛んに

た。追儺羽織はごく最近購入したものだと見えて、新しい印象を受けた。多くの人々は男女ともこの羽織を着るが、一部は打掛を着る。これは元来、集落の人々が身に付けていたものと見えて、年季の入った印象があった。大豆が落ちていたので、つまみ食いすると、隣人に「これは食べるものではない、食べるのは祈禱を終えた豆だけだ」とたしなめられた。

いよいよ本堂に移った。陽気な住職から法話があり、護摩が始まった（図 89）。参詣者の名前が読み上げられる。参詣者の前には長机が置かれ、そこに朱塗の大きな升が置かれている。そこに若干の大豆が入っていた。やがて豆撒きとなり、人々は本堂の右端で白木の大きな升を受け取って解散した。この升は、2月中旬の馬頭観音大祭に持参して、供養をしてもらうものである。

29. 黒沢田楽（2月第1日曜日）

黒沢田楽は、鳳来寺田楽、田峯田楽と並んで三河三田楽の1つに数えられるもので、静岡県境の標高 400 米以上の集落で行われる。

10 時半頃に飯田線本長篠駅で降り、頼んであったタクシーで登っていき、静岡県境に近い黒沢集落に着いた時には 11 時を過ぎていた（図 90）。7 戸ほどしかない黒沢集落は、



図 90 黒沢集落（平成 25 年 2 月 3 日）

堂々たる茅葺屋根の荻野家は、この田楽で中心的役割を担ってきた鍵取で、「おくの間」は田



図 92 阿彌陀堂（平成 25 年 2 月 3 日）

楽で用いる神聖な部屋である（図 91・98）。当主は祭礼前後の 7 日間、別火生活を送り、肉・魚を避けている。その横を通って山を登っていくと、道端に「白山様」との立札のある石の小さな祠があり、そこから更に登ると、開催場所の方福寺（峯福寺）阿彌陀堂がある。ふとみると、別な方向に山を登っていく白衣の男たちがいた。先頭の者は、のちに舞で用いる鉾を肩に担いで運び、続いて神饌（神酒、塩、米、幣など）を三方に乗せて運ぶ者たちが続いた。彼らは田楽を前にして、山中各所にある小さな祠

新城市に併合される以前には、南設楽郡鳳来町七郷一色（ななさと いっしき）といった。



図 91 荻野家（平成 25 年 2 月 3 日）

前後の 7 日

間、別火生活を送り、肉・魚を避けている。その横を通って山を登っていくと、道端に「白山様」との立札のある石の小さな祠があり、そこから更に登ると、開催場所の方福寺（峯福寺）阿彌陀

を巡っているのである（末社参り、鎮守様の祭、小神様の祭）。彼らは、祭礼当日の朝、萩野家で白餅、田植えの弁当、「いなぼら」飯を作成し、小神様に供えるのである。すでに阿彌陀堂の前には人々が集まり、「阿彌陀如來」の幟が立てられ、焚火がなされていた。昭和26年に一旦倒壊し、昭和38年に新築された阿彌陀堂は、外見は古そうだが、内部は白木がなお美しく、床以外は新しいような感じがした（図92）。正面には本尊が安置されているようだったが、よくは見えない。その上には幣が垂れ下がっており、神佛習合であることが分かる。一角に囲炉裏のある奥の部屋があり、そこでは酒盛りが行われていた。



図93 つるぎ（平成25年2月3日）

れ、あるときには強い弾圧を受け、昭和の戦争では中断を余儀なくされたが、昭和28年に復活し



図95 志、（平成25年2月3日）

た。開催日は旧暦正月6日だったが、のち2月第1日曜日に行われるようになった。黒沢田楽は、「墨つけ田楽」、「墨ぬり田楽」とも呼ばれる。舞は、「鎮守の舞」、「阿彌陀の舞」、「はやしもの」、「とこつる」、「源蔵改め」、「つるぎ」、「もどき」、「ほこ」、「きね」、「志、」、「こま」、「みのくち」、「おきな」、「まつかげ」、「さんばそう」、「くなくつくり」、「きぬきせ」、「いみぞさらえ」、「田うち」、「しばかり」、「いもゆゑ」、「もみまき」、「とりおい」、「むぎかり」、「くわとり」、「むぎこめつき」、「ひる」、「あらう」、「田うえ」、「あわとり」、「あづき」、「まめ」、「いもとり」、「としのみ」、「いなぼら」、「げどうばらい」という段階で構成されている。つまり独特の部分のあと、中盤に田遊（たあそび）があり、最後は霜月神楽と同じく外道祓いで終わる。訪れた日は外部取材があったため、後日その様子を映像で確認することができた（「奥三河 のき山放送局第44回」）。

現場配布資料を見た。黒沢集落は、いまでは人里離れた山村であるが、かつては遠州に通じる要路に当たり、立ち寄る人馬も多かった。この集落は、平家の落人による開拓との言い伝えもあるが、黒沢田楽の起源は不明で、一番古い田楽帳は文化13年（西暦1816年）のものだという。黒沢田楽は、あるときには寺院が移転させら



図94 ほこ（平成25年2月3日）

た。開催日は旧暦正月6日だったが、のち2月第1日曜

日に行われるようになった。黒沢田楽は、「墨つけ田楽」、「墨ぬり田楽」とも呼ばれる。舞は、「鎮守の舞」、「阿彌陀の舞」、「はやしもの」、「とこつる」、「源蔵改め」、「つるぎ」、「もどき」、「ほこ」、「きね」、「志、」、「こま」、「みのく

祭礼が始まったのは11時半だった。阿彌陀堂の中央には呉座が敷かれている。祭壇に向かって左側には20人ほどの新城市立東陽小学校の生徒たち（女兒が過半数）が、白い羽織を着て笛の準備をしており、また太鼓がそこに準備されている。同じく白い羽織を着た保存会長の諸井光二氏が挨拶し、昨年末には開催を危ぶんだが、本日開催に漕ぎ着けたと述べた。「鎮守の舞」（別



図 97 おきな（平成 25 年 2 月 3 日）



図 98 黒沢集落（平成 25 年 2 月 3 日）

名順（ずん）の舞）、「阿彌陀の舞」は花祭の撥の舞を思わせる動作である。「とこつる」は、鎮守の舞を片足で速く行うものである。このころ外では接待があった。日本酒が振舞われ、竹輪が配られた。鍵取の萩野豊氏が担当する「つるぎ」は、花笠をかぶった舞人が榊の葉を噛み、当初は太刀を鞘ごと持って、途中から太刀を抜いて、羽ばたくように激しく舞うもの

で、黒沢田楽で一番の見せ場とされる（図 93）。「もどき」は「つるぎ」を真似たものだが、若い男性が同様の装束で、藁を束ねて鞘にした木刀を持って舞った。「ほこ」（別名鎮めの舞、ひのうさま）は、鍵取が顔の左上側に「鼻高の面」を



図 96 こま（平成 25 年 2 月 3 日）

付け、途中から鏢のところに御幣を付けた鉾を持って舞う（図 94）。「きね」は「もどき」と同じ若者が杵を持って舞う。「志ゝ」は獅子

舞だが、「女郎面」を顔の左上側に付けた鍵取が、タツツケをはき、襷をかけ、右手に扇を持ったまねきと一緒に舞う（図 95）。「こま」は、駒の面を頭上にかぶり腰を低くして舞ったあと、馬喰が出てきて面白い駒買いの問答をする。ここから田遊が始まる（図 96）。「みのくち」は水の口祭のことで、2人で座して、農事の予祝であるみの口申しの歌ぐらを読む。「おきな」は、3人が座し、左の者が松景の面を持ち、中央の者が翁の面を顔の左上に付け、右の者が面を付けずに座って、歌ぐらを読む。これは猿楽の翁にあたり、方福寺を祝福するとともに天下安全、五穀成就の祈禱をするものだという（図 97）。「くなつくり」は養蚕や帛づくりを象り、太鼓を置いて田畠に見立てた。

ここで時間がなくなり、帰宅することになった。帰りは新城市教育委員会の自動車で、三河大野駅まで連れて行って頂いた（『鳳来町誌 文化財編』、山本宏務『奥三

河のまつり 1 『黒沢田楽』、林正雄監修『黒澤田楽』、現地配布資料を参考にした)。

30. 砥鹿神社の火舞祭 (2月3日)

砥鹿神社の火舞祭 (ひのまいさい) は、同社の末社八束穂神社で行われる火災疫病除の神事である。同社の祭神は天穂日命 (あまのほひのみこと) で、素戔鳴命 (すさのおのみこと) の子であるという。

長久手古戦場を高速バスで14時に出発し、冬の設楽原を通過して川路で降り、三河東郷駅から飯田線で三河一宮駅に着いたのは、16時直前だった。まだ明るかったので、砥鹿神社里宮の西参道石鳥居の新しい説明板に気付



図100 砥鹿神社から豊川へ (令和3年2月7日)

いた。天保12年 (西暦1841年) に建立され、豊川海軍工廠の空襲

(昭和20年8月7日) で被害を受けた鳥居を、修復して昭和31年にここに移築したのだという。よく見ると、確かに石に黒ずんだところと白いところとがあり、欠けたところもある

(図99)。境内に入ると、左手の駐車場の向こうに、一宮町護国神社があった。ふと拝殿の方を見ると、白い軽トラックに荷物を積んだ神職たちが出て来た。そこで火舞祭の場所を尋ねると、案内するとの申し出を受けた。参集殿を越えて、住宅地と接したところに、八束穂神社はあった。小さな木製の社だが、すでに注連縄が張られており、5人ほどの神職が総出でその前に莫塵や座布団を敷き、神饌を準備していた。ふと見ると囲いに登校集合板が張っており、一宮西部小学校の生徒の集合場所となっていた。まだ時間があるので、まず本殿に参詣して、境内を見て回った。コロナ危機下ということもあり、境内に人影はほとんどない。弓道場・剣道場も客殿も社務所も閉鎖されている。



図99 砥鹿神社里宮西参道石鳥居 (令和3年2月7日)



図101 北野神社 (橋尾の天神様、橋尾神社) (令和3年2月7日)



図 102 豊川の土手より砥鹿神社里宮・北野神社・本宮山を望む（令和3年2月7日）

そこで境内を出て、豊川の岸辺に降りていった（図 100）。砥鹿神社里宮は豊川の河岸段丘の上にある。河岸段丘から豊川の土手まで、低地に数百米の広大な田園が広がっていた。冬の田園は寒々とした光景である。畑には作業をする農夫の姿があった。この広い田畑の真中に、島のよ



図 103 豊川の土手より見る落日（令和3年2月7日）

うに小さな森があり、さながら豊川の中洲のようだった。そこには、北野神社（橋尾の天神

様、橋尾神社とも）がある。天神様には周囲に多くの白い旗が翻り、境内に多くの合格祈願の絵馬が奉納されていて、また「村社橋尾神社御供田」の標識があった（図 101）。天神様を越えて土手に登ると、向こうにようやく豊川の水面が見えた。土手

の階段に腰掛けると、左から砥鹿神社里宮の森、北野神社、本宮山が並んで見え、それらの位置関係がよく分かった（図 102）。左手を見ると、大きな赤い太陽が森のなかに没するところだった（図 103）。行きにいた農夫は、帰りにはもういなくなっていた。



図 104 八束穂神社（令和3年2月7日）

17時33分、八束穂神社に戻ると、薄暗くなった森のなかで雪洞の燈火が揺

らめき、周囲に5人ほどの人が集まっていた（図 104）。拝殿に向かうと、神社の広報係が写真機を構えている。やがて17時55分、社務所から神職6人、巫女1人が出てきて、列をなして拝殿に入り、拝礼をした。一同は多比す社の前を通り、



図 105 神職たちの行列（令和3年2月7日）

八束穂神社に向かった（図 105）。通常は氏子の娘が務める舞人の役を、コロナ危機下の今年は、巫女が務めるのだという。雅楽が奏されるなか、18時2分に一同は八束穂神社前に着座した。八束穂神社前では焚火がされ、消防団員、一宮区長、県議会議員、参詣者など、30人ほどが集まっていた。昔は鯨幕を張ったようだが、いまは張っていない。社前はすでに漆黒の闇となっており、庭燎と雪洞だけが明かりのた

め、儀式の様子を撮影するのも目視するのも難しい。そのため以下の記述も、『三河国一宮砥鹿神社誌』を参考にしている。

直ちに神事が始まった。修祓、開扉、献饌、祝詞奏上のあと、神剣神事に入った。これは巫女が神剣を何度も跨ぐ儀式である。2人の神職が座る間に奉書で包んだ神剣があり、巫女は右手で握った鈴を軽く振り、左手で中啓を持ちながら8の字に



図106 火舞祭（令和3年2月7日）

歩いて、5回も神剣を跨ぐのである。続いて火鑽神事に移った。これはその場で火鑽具、すなわち檜の板に空木の杵を用いて火を鑽り出すのだが、時間がかかった。18時26分頃、火が点いた。そして火舞神事になる。鑽り出した火を松明に付け、それを右手を持った巫女が、左手で鈴を振りながら、社前を左右に何度も往復するのである（図106）。拝礼、閉扉して、全て終わったのは18時40分頃だった。一同は列をなしてまず拝殿に行き、拝礼後に社務所へと帰って

いった。

31. 豊橋の鬼祭（2月10日・11日）

豊橋は東三河の中心都市である。かつて今橋といわれ、江戸時代には東海道吉田宿として栄えたが、明治維新の際に改称を命じられ、豊川に掛かる橋に因んで、豊橋と名付けられた。豊橋は軍都として知られるようになり、第十五師団司令部はいま愛知大学豊橋キャンパスになっている。豊橋は竹輪が名産品で、県内唯一の路面電車（豊橋鉄道市内線）も風情がある。



図109 豊橋公会堂（平成31年2月10日）

際、伊勢神宮祭主の庶流大中臣基守が同地の司として赴き、「安久美」の「神戸」（伊勢神宮の領地）に「神明



図107 安久美神戸神社（平成31年2月10日）

豊橋の安久美神戸神明社（あくみかんべしんめいしゃ）（図107・110）では、2月10・11日に鬼祭が行われる。天慶3年（西暦940年）、平将門の乱平定の報賽として、朱雀天皇より伊勢神宮に三河国飽海荘（あくみのしょう）が寄進された。その



図108 豊橋正教会（平成31年2月10日）

社」（天照大神を祀る神社）を創建したのが、同社の起源だという。同地産の米・酒・絹・油・糸・紙などは、毎年伊勢神宮に奉獻された。戦国時代に三河國を統治した今川氏は、同社を篤く尊崇し、社殿の造営に加え、社領・太刀・祭礼に用いる神面などを寄進した。永生2



図 111 豊橋駅の人形（平成31年2月10日）

年（西暦1505年）、今川氏親は牧野古白に命じて今橋城（吉田城）を築かせる際、社殿を改築して

城内鎮護・鬼門守護の「城内神明宮」として奉斎した。以来歴代の吉田城主の尊崇も篤く、式年の造営・神宝の奉納等を始め、参拝・祈禱などが行われ、明治まで受け継がれた。元来同社は豊川の支流朝倉川に面した場所にあったが、明治18年に同地が第三師団歩兵第十八連隊の用地（現豊橋公園）となったため、近くの現在地に移された。

同社は、大正12年には県社に列

せられ、いまでも入口には「縣社 神明社」の社標がある。現在の社殿は昭和5年の造営で、平成22年には国登録有形文化財に指定された。祭神は「天照皇大神」だが、「八幡大神」、「秋葉大神」、「菅原道真命」も「配祀」されているという。境内には「護國神社」の社標のある「御霊社」、「猿田彦社」などの祠もある。近辺には豊橋ハリストス正教会（図108）、日本聖公会、日本基督教団、吉田神社、豊橋市役所、豊橋警察署、豊橋公会堂など、重要な施設が集まっている。豊橋公会堂では、鬼祭本祭と同じ時刻に、毎年「豊橋建国記念の日奉祝大会」が行われる（図109）。

宵宮祭が行われる2月10日、長久手を出発したのは7時40分だったが、豊橋駅に着いたのは9時40分だった。改札前には赤鬼の人形が立ち、民芸品の張子面も掲げられていた（図111）。この張子面は、神明社の付近にある市立豊城中学校の生徒などが作成したものだという。路面電車で豊橋公園前駅まで行ったが、少し神社を通り過ぎてしまい、神明社に着いたときには10時直前になっていた。すでに境内には参詣者が多く集まり、8時30分からの修祓を終えた青鬼が、一の鳥居横の潔斎殿から衣装を整えて出てくるところだった。青鬼を担当するのは、八町通三丁目・四丁目の男児（12歳になる直前の小学校6年生）である。見ると一の鳥居の所から4人ほどの男児が、灰色の袴に黒い着物を着て、日の丸の扇子を手にして、組を作って次々に拝殿めがけて走っていた。拝殿前には八角台（儀調場とも）という舞台があり、そ



図 110 境内での厄除タンキリ 飴の飴撒き（平成31年2月10日）



図 112 岩戸舞を前に（平成31年2月10日）

の枠組は石造で、舞台そのものは木造である。八角台の上では、同じ裃姿の大勢の男たちが、一の鳥居の方を向いて扇をひらひらと振っている。やがて青鬼とそれを取り巻く「鬼付」の人々が、鬨の声を上げつつ八角台を目掛けて走ってきた。拝殿前でこれを待っていたのが、3人の女子である。そのうち2人は勾玉の首飾りをした古代女子の服装（桃色・橙色）、1人は「角髪」（みずら）を結った古代男子の服装（緑色）である（図112）。背後の拝殿には、「元帥伯爵東郷平八郎謹書」と署名のある「神明社」の扁額がかかっている。この女子3人は、青鬼が八角台上に着座すると、八角台の上で「岩戸舞」を披露した。天宇受賣命を演じている女子は、中盤のみ「おかめ」の面を付けて舞った。座っていた青鬼も途中から天手力男神の役柄で加わった。舞が終わると、演舞者一同が厄除タンキリ飴の飴撒きを行った。餅投げの要領で行い、これを参詣者が拾うのである。投げるのは、飴及び飴粉（うどん粉）を入れた小さなビニール袋である。そして青鬼は、「鬼付」とともに町中へ走り出していった。「門寄り」といって、各家々を回るのである。

11時47分、呉服町の一団が2人の男子を中心に一の鳥居から境内に入ってきて、八角台を乗り越えて拝殿に入った。



図114 吉田城鉄櫓（平成31年2月10日）

彼らは神事ののち、正午過ぎから神楽殿での五十鈴神楽を奉納した。神楽殿の背後には豊橋ハリストス正教会が聳え、不思議な調和を見せている。2人の男児が、左へ3回 右へ3回 左へ3回まわって踊る。その際左手に幣、右手に鈴を持っている。男児2人は小学校一年生ほどで、月と日とを表した黄金の冠を被り、長い髪を垂らし、おしろいを塗り、唇に紅を差し、装束も含め外見は巫女のようなものである（図113）。ここで一旦休憩となり、境内を離れた。市立豊城中学校の付近に、「第十八聯隊西門」が保存されている。大きな橋を渡って豊川の対岸に行き、食事を済ませた。対岸から見ると、吉田城の鉄櫓が堂々と見えたので、さっそく登ってみた。建物内の展示を見て、明治時代まで堂々たる吉田城の姿が残っていたことが分かった。再建された現在の鉄櫓は、昔の吉田城と比較するとそのごく一部に過ぎないが、この付近の河原には鄙びた風情があり、江戸時代の風景が想起された（図114）。更に豊橋公園を散歩していると、紅白の鯨幕が見えた。明治天皇の相貌を真似たという、角髪の神武天皇の立像があった。これは日清戦争の勝利記



図113 五十鈴神楽（平成31年2月10日）

ここで一旦休憩となり、境内を離れた。市立豊城中学校の付近に、「第十八聯隊西門」が保存されている。大きな橋を渡って豊川の対岸に行き、食事を済ませた。対岸から見ると、吉田城の鉄櫓が堂々と見えたので、さっそく登ってみた。建物内の展示を見て、明治時代まで堂々たる吉田城の姿が残っていたことが分かった。再建された現在の鉄櫓は、昔の吉田城と比較するとそのごく一部に過ぎないが、この付近の河原には鄙びた風情があり、江戸時代の風景が想起された（図114）。更に豊橋公園を散歩していると、紅白の鯨幕が見えた。明治天皇の相貌を真似たという、角髪の神武天皇の立像があった。これは日清戦争の勝利記

ここで一旦休憩となり、境内を離れた。市立豊城中学校の付近に、「第十八聯隊西門」が保存されている。大きな橋を渡って豊川の対岸に行き、食事を済ませた。対岸から見ると、吉田城の鉄櫓が堂々と見えたので、さっそく登ってみた。建物内の展示を見て、明治時代まで堂々たる吉田城の姿が残っていたことが分かった。再建された現在の鉄櫓は、昔の吉田城と比較するとそのごく一部に過ぎないが、この付近の河原には鄙びた風情があり、江戸時代の風景が想起された（図114）。更に豊橋公園を散歩していると、紅白の鯨幕が見えた。明治天皇の相貌を真似たという、角髪の神武天皇の立像があった。これは日清戦争の勝利記



図115 神武天皇像（平成31年2月10日）

念碑の上に建てられ、戦後一時撤去されていたのを、復活させたものである（図 115）。立像の前には鳥居があり、「彌健神社」、「舊藩祖 豊城神社」という二つの社標があったが、社殿はなかった。この日この立像の前には、数人の作業員により幄舎や椅子が並べられていた。2月11日の9時から、ここで「豊橋建国記念の日奉祝大会」が行われるのである。更に歩いていくと、豊橋市立美術博物館があった。明後日から閉鎖して改装するとの掲示がある。地元出身の芸術家の作品が展示されており、また農村鍛冶の作った農具・漁具の展示があった。付属の喫茶店で珈琲を啜り、寒空で冷え切った体を温めた。



図 116 奉幣祭を前に（平成 31 年 2 月 10 日）

14時半過ぎに境内に戻ると、子鬼神事の予習をしていた。鬼は予習の際には面を付けない。子鬼は男児（10歳）がやるが、その真剣な表情が見て取れた。予習ではあるが、鬼に付随する飴撒きはいつも通り行われた。人手がやや少ないため、動作がよく見えた。

15時少し前から拝殿で奉幣祭が始まった。これは鬼祭奉賛会会員が一同で参拝する行事である。橙の袴に緑の着物の鬼祭奉賛会員は、地元民でなくともなれるという。神事が終わると、八角台で奉賛会員による厄除飴まき行事が行われた（図 116）。



図 117 青鬼の門寄り（平成 31 年 2 月 10 日）

16時過ぎ、青鬼が「門寄り」から戻ってきた。青鬼は再び拝殿前の八角台に向かう。ここで朝と同じく、再び岩戸舞が披露され、青鬼厄除飴まき行事が行われた。青鬼は、今度は自分の出身地である八町通三丁目・四丁目の「門寄り」に向かった。

宮司が談合神社へ参向する時間ではあったが、ここで青鬼に同行して、八町通三丁目・四丁目の「門寄り」を見学した（図 117）。警固衆が交通整理をするなか、青鬼は家々を巡ってい

く。全ての家を巡るのではなく、予定された家のみを回っているようで、見た印象では商店が多いように思われた。家に入ると、家人たちが玄関で待っている。青鬼は1人1人の頭を撫で、ご祝儀を貰う。ご祝儀は多くの場合ご祝儀袋に入れた紙幣だが、一升瓶2本を出す家もある。なお青鬼の場合、警固衆は男が多いものの、女兒も含まれている（大人の女性はいない）。あちこちでタンキリ飴が播かれ、まぶしてある飴粉が朦々と舞う。飴なしで飴粉のみを播くこともあるようだ。ふざけてお互いに粉を掛け合い、



図 118 飴粉の掛け合い（平成 31 年 2 月 10 日）

真白になっている人々もいる（図 118）。それにしても、一日中面を付けて、前がよく見えないまま走り回る鬼の労力は、大変なものだろう。



図 119 宵宮祭を前に（平成 31 年 2 月 10 日）

「門寄り」が終わって、一行は 16 時 30 分ころ神明社に戻った。一の鳥居のとこ
ろで隊列を組み、あるだけの粉をまき散らしなが
ら二の鳥居まで進み、八角台を乗り越えて拝
殿に入った。神職の挨拶のあと、その音頭で安
久美神戸神明社及び八町通三丁目・四丁目の万
歳を三唱した。続いて面を外した青鬼の少年が
その槌を放り投げ、皆で奪い合う行為が 3 回繰
り返され、最後は男たちが少年を担ぎ上げて蛇
行しながら練り歩き、境内から出ていった。漆
黒の境内には静寂が訪れた。昼にもまして、夜
は冷え込みが厳しい。

だがそれから 10 分も経たないうちに、宵宮祭
の準備が始まった。実はこれまでの部分は、後年付け加わったもので、本来の祭礼は
これからなのである。一の鳥居の外から「わっしょい」の声をかけながら、飽海町の
一団が行列を組んで現れた。「飽海連」の旗を掲げ、天狗の顔を描いた提燈を手にし
ており、具足を入れた櫃を先頭に、薙刀、太刀などが続く形で進む。一同は手水舎の
前で停止し、天狗役の和服の青年が厳粛な雰囲気の中かで手を洗うまで待った。行列
は拝殿に一旦入り、出て一の鳥居横の潔斎殿に移り、天狗の衣装を整え始めた。その
直後、低い厳粛な笛の音とともに、「赤鬼」と記した提燈を持った一団が現れた。こ
れも赤鬼役の青年を中心に、今度は黙々と彼らも潔斎殿のなかへ入り、赤鬼の支度を
始めた。当日とは異なり、この日は潔斎殿の扉が開かれており、内部の様子がよく見
える。潔斎殿では、天狗及び赤鬼が衣装を整えている。彼らは和服の下は白い禪で、
西洋風の下着は一切身に付けていない。どちらも赤い衣装を身に付けるが、上に天狗
は具足、赤鬼は赤い肉襦袢を付ける。潔斎殿の外では、「警固衆」の人々が並んで、
衣装の準備を待っている。彼らは、全員が男で、「あーかーい」と叫んでいる。
一人の男が甲高い声で「あーかーい」と叫び、他の「警固衆」が低いおどろおど
ろしい声で「あーかーい」と言うのを繰り返すのである。

そのうちに他の町々からも次々に行列がやってきた。浦安の舞をする乙女 2 人
は、さきほどから社務所前にいる。司天師を出す町は、行列を組んでやってきた。掲
げる旗は、上部に旭日旗、下部に旭連とある（図 119）。五十鈴神楽を披露する呉服
町の人々も、「久禮羽」の提燈を手にして男子 2 人と一緒にもう一度やってきて、
早速神楽殿で予行をした。ただ黒鬼の姿は見つからなかった。

19 時少し前、白衣の神職が拝殿に上って宵宮祭が始まった。神事が行われ、明日
に備えて浦安の舞の予行が行われた。同じ頃、八角台では司天師が予行をした。宵宮
祭では、同時並行的に、いろいろな場所で予行が行われる。観光客が少ない時間だ
が、地元の人々を中心に結構な賑わいになっている。潔斎殿では、天狗及び赤鬼が準
備を続けているが、まだ終わらない。当日と違い、予行では天狗も赤鬼も面を付けな
いようだった。行事はまだ続いていたが、この晩はここで失礼した。

本祭の行われる2月11日、8時20分頃に路面電車で到着すると、境内からはもう神楽の音が聞こえてきた。「御日の出神楽」である。10歳前後の男児が2人、おもしろいに巫女の姿で、五十鈴神楽と同じ金の冠を頂いて踊っている。神楽を奏する子供たちのなかには、笛を吹く女兒も2人ほどいた。間もなく神楽が終わると、紋付き袴の男児の父親2人と共に、一同で神楽殿の前に並んで記念写真を撮った。社殿では、子鬼になる子供が、まだ鬼の装束を付けず、鬼の面と共に修祓を受けている。それにしても、予定表ではこれらの行事は8時半とのことだった。どうしてもうやっ



図 120 額殿前での祈禱（平成 29 年 2 月 11 日）

ってしまったのかと聞くと、「御日の出神楽」はもともと日の出の時刻にやったものなので、これでも遅くなったのだといわれた。

10時、「例祭」の開始である。拝殿に向か



図 121 拝殿での浦安の舞（平成 25 年 2 月 11 日）

って左手の社務所の前に、橙の袴に緑の着物の鬼祭奉賛会会員たちが整列し、神職を待った。神社庁から参向した献幣使を先頭に、神職たちが歩

み、これに会員たちが続いて、右手の額殿の前に赴いた（図 120）。額殿には、赤鬼の人形が立った姿で常時飾られており、一同はそこでまず祈禱を行い、それから拝殿に入っていった。拝殿での神事では、浦安の舞が披露された（図 121）。1時間ほど拝殿での神事が続き、やがて奉賛会会員たちが出てきて、拝殿前に群がった人々に向かって、厄除タンキリ飴を播いた。



図 122 拝殿に運び込まれる道具箱（平成 29 年 2 月 11 日）

続いて赤鬼、青鬼、司天師を演じる奉仕者の修祓が行われた。色とりどりの袴を着た警固衆が

続々と集まってきて、奉仕者を中心に行列を組んで境内に入る。奉仕者は青の袴に黒の着物で、鬼の装束や供物は木箱で運び込まれていく（図 122）。修祓が終わると、一の鳥居横の潔斎殿で着用が始まる。その間、外では警固衆が「あーかーい」と大きな声で叫んでいる。

11時50分頃、外から子鬼の一団がやってきた。この子鬼を取り囲んでいるのが、日の丸の扇を手に持ち、紺の着物に茶色の袴をはき、赤い袋を肩から斜めに下げた「鬼付」の大人たちである（図123）。子鬼は小さいが、装束は大人の鬼とほぼ変わらない。一の鳥居のところで一旦止まった子鬼の一団は、やがて歓声を上げて境内に駆け入った。駆け入るときにタンキリ飴を撒くが、飴には飴粉がまぶしてあるので、これが舞い上がってあたりに濛々と立ち込める。人々は粉まみれになり、髪が白髪のようにになっている人もいる。子鬼は神社に入ると、拝殿前で田楽ならし（地ならし）と呼ばれる動作を始めた。これはあとで行われる、大人の鬼の「からかい」と類似のものである。



図123 子鬼（平成29年2月11日）



図124 黒鬼（平成29年2月11日）

田楽ならしが終わったところで、12時30分に神職の行列が拝殿に入っていく、神事が始まった。神楽殿では、このとき五十鈴神楽が奉納されている。これは昨日と同じく、小学校一年生ほどの男子2人が、巫女の装束で踊るものがある。拝殿では、神事に続き、舞姫2人による浦安の舞が奉納された。この神楽殿・拝殿での一連の舞のあと、舞姫2人や参列者により、再び八角台から厄除タンキリ飴が播かれた。



図125 赤鬼（平成29年2月11日）

13時18分、いよいよ鬼たちが潔斎殿から出てきた。まず出てきたのは黒鬼である。不気味な面を付けた黒鬼は、からかい

神事を傍で見守り、「年占」の御玉引の審判をする役柄で、常に「大玉串」という大槌を手にした袴姿の男を連れている（図124）。この黒



図126 司天師・天狗・笹良児（平成29年2月11日）

鬼に頭を撫でられた子供は、夏病みせず健康に育つと昭和10年頃から言われるようになったが、子供を撫でるとき以外は手を見せないのが黒鬼の特徴である。この黒鬼が見守るなかで、潔斎殿から主人公の赤鬼が出てくる。赤鬼は撞木を持ち、虎皮の猿股をはき、髪から足袋まで全身が赤くなっており、かなり太って見える。赤鬼面は般若のような形相であるが、真赤である（図125）。赤鬼は潔斎殿の前で手を広げて反り返ったり、ひょこひょこ飛び跳ねたりと、ユーモラスな仕草を繰り返した。これが「からかい」と呼ばれる動作である。続いて天狗が、最後に司天師2人

が現れた（図126）。天狗は猿田彦の化身とされ、鬼と対決する役である。太刀を背中にさかさまに背負い、薙刀を脇に抱えている。全身を鎧で完全に防備し、頭には侍

烏帽子を付けた上で、更に上から頭巾をしている。この天狗と赤鬼とは、この潔斎殿の前で対決を始める。鬼は例の動作で天狗を挑発し、これを天狗が成敗しようとする。2人の掛け合いが、これから続いていくのである。

このころ拝殿前では「御的神事」が始まった。まず八角台（儀調場）の社殿側のところに、「御頭様」（おかしらさま）が、「御船代」（おふなしろ）という船の上



図 127 御頭様の前での御的神事（平成 25 年 2 月 11 日）

に屋根を乗せたような台に乗る形で安置される。御頭様は、もともとは獅子頭を用いていたというが、いまは多くの白い毛に囲まれていて、外部からではその形態を確認することができない。かつてこの毛は、毎年馬の尻尾を抜いて新調されていたという（図 127）。次いで八角台から鳥居の方向に 20 歩離れたところに、1つの霞的を立てられる。的は薄く丸い板で、直径が鯨尺の 1 尺（38 糎）あり、裏面



図 128 的の裏面（平成 29 年 2 月 11 日）

に「鬼」の上の点（角）がない文字（甲乙ムの 3 字が組み合わせられており、「こうおつなし」（勝ち負けはない）と解釈する）が書かれ、これを細い竹で挟んで地面に突き刺す（図 128）。登場人物は、干地（高い土地の代表）、福地（低い土地の代表）、矢取の 3 人である。矢取が左右の手に弓矢を握み、「御頭様」の前で両手を上げて体を反り返らせる動作を行い、左右の干地、福地に弓矢を渡す。2人の射手は合計 12 回的の方へ射て、その後その的を氏子が奪い合うのである。



図 130 司天師田楽（平成 29 年 2 月 11 日）

14 時
30 分頃、
御的神事
が終わった
拝殿前に、
対決を
続けて
きた天狗
及び赤鬼
が徐々に



図 129 天狗の切祓（平成 25 年 2 月 11 日）

移ってくる。赤鬼は、警固衆が翻す日の丸の扇を目がけて進んできて、天狗も付いてくる。赤鬼は天狗を、いろいろな手段で挑発する。「すっこき」は撞木を投げる動作、「鼻投げ」は鼻糞を投げる動作、「金玉投げ」は鞆丸の垢を投げつける動作である。しかし万策尽きて、赤鬼はタンキリ飴・飴粉を振りまく警固衆を従えて、町中に走り出ていく。雪が降りしきるなかでのこと

だった。これらの光景を、額殿前で黙って見守るのが黒鬼である。15時過ぎから、



図 131 年占に用いる榎玉（平成 29 年 2 月 11 日）

社殿前に残った人々による舞が次々に行われた。天狗の切祓（図 129）、笹良児の田楽ポンテンザラ、天狗神楽、御幸神楽、司天師田楽（図 130）という順番である。司天師田楽は、どこことなく笹踊の動作を想起させる。最後に御玉引の年占（おたまひきのとしうら）が行われる。これは榎玉という大注連縄を結んだものを用い、まず天狗が綱を切り、干地、福地がこれを引き合せて、どちらが豊作になるかを占うという。審判をするのは黒鬼である（図 131）。

17 時過

ぎ、御神幸が談合神社（談合町）に向けて、約 1 軒の道のりで行われた（図 132）。神社前の路面電車が通る大通りを横断し、数区画行ったところを左に曲がり、また数区画行くと



図 132 御旅所への御神幸（平成 29 年 2 月 11 日）



図 133 談合神社での天狗の切祓（平成 29 年 2 月 11 日）

左手に御旅所の談合神社がある。行列は、太玉串、黒鬼、神楽殿（押し車に乗せた太

鼓）、天狗、金幣、御頭様、官司、司天師、笹良児という順番に並ぶが、江戸時代には神楽殿と天狗との間に大鉦があった。この間、御神体とされる御頭様は、常に南向きを維持しなければならないので、移動する際に向きを調整していく。行列が談合神社に置くと、御頭様が社殿内に安置され、黒鬼は社殿の前に立ち、神事の前に天狗の切祓があった（図 133）。天狗は自分の出番が終わると、警固衆とともに外に出て行ってしまった。つまりこれから天狗の一行が町内を回るのである。このとき天狗の警固衆は、通り道であられを投げ

ていく。談合神社では神事が始まり、神楽が奉納された。一部の人々は、社務所で既に食事に入っている。しかし司天師の 2 人は、緊張を解くことなく黙って座っていた。

18 時前に神楽が終わって、行列は談合神社から安久美神戸神明社に向けて出発した。帰途は別な道を通ったが、神楽もなく静かな移動だった。すっかり暗くなった神明社の森に到着すると、官司の音頭で、一同が安久美神戸神明社鬼祭に万歳を三唱して、祭礼は終了した。こうして 2 日にわたった行事は終了したのである（安久美神戸神明社公式サイト、豊橋市広報公聴課『ふるさと再発見ガイドブック 知るほど豊

橋【その十】春を呼ぶ、鬼と天狗とタンキリ飴 豊橋鬼祭』（平成 26 年）を参考にした）。

32. 下之森のオコワ祭（2月11日）

オコワ祭とは、神饌の強飯を入れた櫃を菰網（荒縄で作った網）で包み、これを岩に激しく叩きつけ、遂に櫃が壊れて米が餅状にま



図 135 八幡神社の公民館（左）と拝殿（右）（平成 28 年 2 月 11 日）

で奪い合うという行事である。この種の祭礼は西尾張に見られ、今日では海部

郡七宝町下之森（八幡神社）の事例（春季例祭、オコワイ（御強飯）、コワイコワイなどと呼ばれる）、海部郡佐織町勝幡（勝幡神社）の事例が知られている。炊いた米を奪い合う祭礼としては、

西三河の「御櫃割」（室町神明社）もあるが、そこでは岩に叩きつけるのではなく、手で櫃を割るという行為が見られる。

七宝町下之森（しものもり、かつては伊麦森村）は元来、尾張國海東郡の一村落であった。この地域では、田では稲、麦、菜種などの二毛作、畠では野菜を栽培する農村で、オコワ祭は旧正月の予祝行事であったと推測されているが、その起源は定かではない。なお海部郡七宝町は、平成 22 年にあま市に統合された。

下之森に着いたのは 9 時 55 分だった。9 時には「トンモ太鼓」による集落内への行事開始通知があった模様である。集落に入っていくと、「奉献 八幡神社」の幟旗が見えた。「村社 八幡神社」の社標、（建国記念の日のためか）2 つの国旗を付けた朱塗の木造鳥居、石の蕃塀を過ぎると、そこに舞殿のような拝殿があって、その奥に拝殿とは分離した本殿があり、拝殿の左隣に公民館があった（図 134・135・136）。境内の左手には、銀色の鉄の火の見櫓があった。境内の右手には、オコワ祭で使用する注連縄をした岩がある。実は、オコワの櫃を叩きつけるのは、元来拝殿の基礎部分であったのだが、平成 20 年よりこの岩を設置して、用いるようになったのだという。拝殿のなかに、市教育委員会の説明版がある。それによると、下之森のオ



図 134 下之森八幡神社（平成 28 年 2 月 11 日）



図 136 オコワ祭の神事：拝殿から本殿を望む（平成 28 年 2 月 11 日）

コワ祭がいつから始まったかは分からないが、昭和20・30年代までは青年団中心の激しい祭だったといい（いまは下之森の役員及び厄年会が実施）、またオコワを食すると夏病みをせず、お櫃の木片は雷除けになるという。更に菰網は、同じものを補修して使っているという。公民館内の掲示によると、同社の創建は慶長4年（西暦1599年）で、八幡神社にも関わらず、祭神は応神天皇・神功皇后ではなく、天照皇太神だという。境内には稲葉社（祭神は倉稲穂神）、更に末社として秋葉社（祭神は加具土神）、八幡宮（祭神は海部郡従三位中社天神）があるという。

到着したとき、祭礼ろだった。人々は集ま真を撮っている。そのった。厄年らしき年代性が目立つ（女性の厄23年からで、厄払い祈が契機だという）。拝が用意されている。まが用意されている。集を行った。やがて白黒



図137 オコワの修祓（平成28年2月11日）

殿で、青い狩衣の神職を中心に神事が行われ、神饌が奉獻された。よく見ると、本殿の前に2つの櫃がすでに奉納されている。このなかに入っている2升のオコワは、七宝町川部の和菓子屋「三越」に注文したものである。10時15分、神事が終わって篝火に点火がされ、甘酒及び沢庵の振舞が始まった。10時33分、櫃が撤下され、菰網で包む作業が始まった。話し声、笑い声が響き、賑やかな雰囲気になっている。その作業が終わると、その作業をしていた年配男性たちが、次々にお神酒を口に含んで、菰網の上から櫃にそれを吹きかけた。拝殿では、すでに参詣者に配る撤下品の準備が厄年の人たちによって始まっている。



図138 オコワ祭（平成28年2月11日）

ここからいよいよオコワ祭の本番である。その拝殿前に菰が敷かれ、その上に菰網に入れた櫃が一旦安置された。狩衣の神職が、10時50分前にこの櫃に修祓を行った（図137）。これに綱をつけ、10時54分から、岩に叩きつけるのが始まった（図138）。最初は厄年の男性2人だったが、徐々に厄年の女性も加わった。力の要る作業なので、女性の場合は4人がかりで行う。やがて集落の年長者もこの作業に加わった。11時4分、青いビニールシートが敷いてあるところで、菰網の解体作業が行われた。初めは年長者の男性たちが行っていたが、やがてそれに子供たちが群がった。男の子も女の子も夢中である。彼

はちょうど始まることによって、拝殿前で記念写光景は同窓会のような人々は、男性より女除祈願者の参加は平成願者の減少による減収殿前には、左右に篝火た公民館前には、菰網落の長が、開会の挨拶横縞の幕で覆われた拝

殿で、青い狩衣の神職を中心に神事が行われ、神饌が奉獻された。よく見ると、本殿の前に2つの櫃がすでに奉納されている。このなかに入っている2升のオコワは、七宝町川部の和菓子屋「三越」に注文したものである。10時15分、神事が終わって篝火に点火がされ、甘酒及び沢庵の振舞が始まった。10時33分、櫃が撤下され、菰網で包む作業が始まった。話し声、笑い声が響き、賑やかな雰囲気になっている。その作業が終わると、その作業をしていた年配男性たちが、次々にお神酒を口に含んで、菰網の上から櫃にそれを吹きかけた。拝殿では、すでに参詣者に配る撤下品の準備が厄年の人たちによって始まっている。

ここからいよいよオコワ祭の本番である。その拝殿前に菰が敷かれ、その上に菰網に入れた櫃が一旦安置された。狩衣の神職が、10時50分前にこの櫃に修祓を行った（図137）。これに綱をつけ、10時54分から、岩に叩きつけるのが始まった（図138）。最初は厄年の男性2人だったが、徐々に厄年の女性も加わった。力の要る作業なので、女性の場合は4人がかりで行う。やがて集落の年長者もこの作業に加わった。11時4分、青いビニールシートが敷いてあるところで、菰網の解体作業が行われた。初めは年長者の男性たちが行っていたが、やがてそれに子供たちが群がった。男の子も女の子も夢中である。彼



図139 オコワ（平成28年2月11日）

最初は厄年の男性2人だったが、徐々に厄年の女性も加わった。力の要る作業なので、女性の場合は4人がかりで行う。やがて集落の年長者もこの作業に加わった。11時4分、青いビニールシートが敷いてあるところで、菰網の解体作業が行われた。初めは年長者の男性たちが行っていたが、やがてそれに子供たちが群がった。男の子も女の子も夢中である。彼

らは、奪った強飯を見せてくれた。細かい木屑が沢山ついている（図 139）。強飯を巡る争いは、30分経っても続いていた。すでに拝殿内は片付いている。周囲を散歩して、バスで帰途に就いた（『尾張西部のオコワ祭調査報告書』、現地説明版を参考にした）。

33. 田峯田楽（2月11日）

田峯（だみね）は北設楽郡設楽町南部の集落である。地域の絆が固い田峯は民俗祭礼の宝庫で、田峯田楽、田峯歌舞伎、盆踊など、一年を通じて貴重な催しが目白押しとなっている。

田峯はいまでこそ閑寂な山村だが、戦国時代には武田氏・徳川氏の対立の舞台となっていた。集落の中心には、木造の砦である田峯城が復元されているが、これは領主菅沼氏の居城であつた。武田氏に与した菅沼定忠、家老の城所道壽は、天正3年（西暦1575年）の長篠の戦いのあと、命からがら逃れた主君の武田勝頼を、自分の居城で休息させようとした。ところが田峯の城門まで来ると、城内の叔父菅沼定直、家老の今泉道善は、長篠の戦いの結果を聞いて織田・徳川方に寝返っており、城主の命令でも城門を開けなかった。結局



図 140 田峯城（平成 26 年 2 月 11 日）

このころも逃れた武田勝頼は、更に北上して三河国北端の武節城で休息し、無事甲信に帰ることができたが、面目を失った菅沼定忠は、自分を裏切った城兵たちを深く恨んだ。1年後のある早朝、菅沼定忠は手勢を率いて田峯城を急襲し、城中の老若男女 96 人を皆殺しにした。謀反を主導した家老（菅沼定忠の手習いの師匠）の今泉道善は、木製の鋸で斬首になったといい、今日でも処刑場及び首塚が残されている。ようやく居城を取り戻した菅沼定忠、城所道壽だったが、やがて武田氏と共に織田信長、徳川家康に滅ぼされ、結局田峯城は、終始徳川家康に従った菅沼定利（定直の息子）のものとなった（図 140・141）。

集落の中心にある田峯小学校は、木造平屋の校舎が印象的で、いまも現役である。校舎前には、二宮金次郎が立っている。この建物も貴重だが、1920年代に澁澤榮一子爵の肝煎で行われた日米交流の結果、日本にもたらされた「青い目の人形」の1つが保存されていることでも知られている（図 142）。

田峯城の復元された木造砦の風景。背景には山と木々が見える。



図 141 田峯首塚地蔵尊（平成 26 年 2 月 11 日）



図 142 田峯の小学校（平成 26 年 2 月 11 日）

この集落にある**田峰観音（谷高山高勝寺）**では、**三河三田楽**の1つである**田峯田楽**が行われる。これは田峰観音に奉献される神事であり、神佛習合の産物である。元来高勝寺（曹洞宗）には、8世紀に松芽観音が勧請された。文明2年（西暦1470年）に田峯城を築いた菅沼三郎左衛門貞吉信濃守定信が、城の鎮護のために高勝寺を崇敬し、更に京都から十一面観世音菩薩



図144 田峯観音の舞台（平成26年2月11日）

を勧請した（図143）。この田峰観音の祭礼に、永禄2年（西暦1559年）に田峯城の城代家老だった城所道壽により導入されたのが、現在傳承されている**田峯田楽**である。田峯田楽は、昼田楽、夜田楽、朝田楽の3



図143 田峯観音（平成26年2月11日）

つの部分からなり、朝から夜まで入念に行われ

る。なお翌日には田峯歌舞伎が行われる。

田峯田楽・田峯歌舞伎を前に、集落では1月末から準備が始まる。まず田峰観音で「小屋掛け」、つまり歌舞伎の舞台設営が行われる。田峰観音の境内には趣き深い藁葺屋根の常設舞台があるが、その前庭に毎年竹を編んで臨時的な屋根を作る。この小屋掛けは、それ自体が重要な伝統技能である（図144）。こうしてできた竹製の屋根の下は、田峯田楽の朝田楽では舞台となり、田峰歌舞伎では観客席となる。小屋掛けに続いて行われるのは、田楽衆と呼ばれる集落の男たちの精進潔斎である。田楽衆の役柄は世襲などで受け継がれており、禰宜、羽織、鳥追い、笛吹きは祭典の7日前から、それ以外の田楽衆は3日前から田楽終了まで、毎日水垢離をとり、食事も家族とは別火とし、斎戒沐浴によって心身を清めていく。更に行われるのが「せいか作り」（祭具製作）である。製作の場は「当宿」（とうや）というが、これは一種の结界なので、塩湯を飲んで精進潔斎をすることが求められ、献饌用の餅を搗くときには、「しきみの葉」を口に加える。この餅の搗き役、返し役は、両親とも健在な者が行うことになっている。当宿で用いる火は、禰宜が切火をして塩投



図145 田峯のバス停から集落への道より望む（平成26年2月11日）

により清めたものである。この当宿でせいか作りを行うのは、禰宜、羽織、鳥追い、笛吹きは2月10日、それ以外の田楽衆は2月11日である。2月11日の祭礼当日も、早朝から精進潔斎の行事などがある。そして昼田楽が始まるのである。

田峯への道は遠い。前日は豊橋に宿泊し、2月11日の始発の飯田線に乗って、本長篠駅で降りた。以前はここから設楽町の田口まで鉄道があっ



図 147 額殿での昼田楽（平成 26 年 2 月 11 日）

たが、すでに廃止され、本数の少ないバスに取って代わられている。田口行きのバスで 30

分、深い谷底に

ある田峯のバス停で降りると、そこから更に歩いて 30 分以上登るしかない（図 145）。田峯田楽を見学した日は、幸い親切な地元民に自動車で行われた。森のなかの急な坂道を上っていくと、に

わかには開けて田峯集落が見えてくる。集落には小高いところが幾つかあり、その 1 つに田峯観音が、別な 1 つに田峯城がある。高地だけに、田峯観音の参道からは周囲の美しい山々を望むことができ、夏も気温が 30 度ほどにしか達しないという。

幟旗が立ち並ぶ参道を通り、9 時過ぎにようやく田峯観音の境内に至ると、そこではちょうど「昼田楽」が始まるころだった。床のない額殿に、三つ巴の紋を付けた白い幕が張られ、田楽衆が土間の上に莫座を引いて着座している（図 146・147）。田楽衆は、禰宜、羽織、鳥追い、笛吹きは立烏帽子や侍烏帽子に直垂を着て、それ以外は烏帽子がなく袴を着て座っている。この昼田楽は「伽藍祭」とも呼ばれ、額殿の西側に小さな結界が設けられ、「伽藍神」を祭る厨子が置かれている。この伽藍神に献饌（赤飯を葉の上に乗せたものなどを供える）が行われたのち、扇の舞、膳の舞、湯桶の舞、萬歳楽、佛の舞が行われた。昼田楽は 10 時には終了した。

田峯田楽の日は田峯観音の祭日でもある。本堂では僧侶たちが「大祈禱」を行っている。多くの参詣者と共に、こちらも昼田楽のあと、10 時からの祈禱に参加してみた。内陣には畳が敷かれ、外陣には椅子が置かれている。僧侶 4 人が般若心経などを唱え、鐘を鳴らし、太鼓を叩く。また僧侶たちは、経文の本をアコーディオンのように開き、閉じるという動作を繰り返す（図 148）。参詣者は、住職のところまで行って額づき、背中を経文で撫でてもらう。正面をよく見ると、本尊の佛像の前に注連縄が張られている。ここにも神佛習合を見ることができる。祈禱が終わると、お札と赤飯とが配られた。参道の土産物屋では、神前に献饌されたものとして「べらべら餅」と称するもの（白とよもぎ入り）を販売していた。



図 146 田峯観音の額殿（平成 26 年 2 月 11 日）



図 148 田峯観音の大祈禱（平成 26 年 2 月 11 日）

また額殿の横では、
た。弓道場は、射場
(あづち：的を置く土
でいく空間)は弓道を
る。射場からの的前を見
壁がある。この弓道大
く愛知郡内で、かつて
愛知郡の支部)に共に
られた。昼田楽が行わ
額が多数掲げられてい
見られる風習で、矢渡
寸の金色の小的)を射
た射手が、感謝を込め
奉納するのである(図



図 149 額殿に掲げられた
「金的中」の額(平成 26
年 2 月 11 日)

朝から弓道場で射会が開かれてい
(射手が弓を引くところ)と塚
手)は常設だが、矢道(矢が飛ん
しないときには境内の一部とな
て右手には、無数の絵馬をかけた
会の参加者には、長久手町と同じ
愛知県弓道連盟愛知支部(つまり
属していた東郷町の人々の姿も見
れていた額殿には、「金的中」の
る。これは愛知県の弓道界でよく
に続き行われる「金的」(直径 3
る行事で、見事に的中を成し遂げ
て神前に「金的中」と書いた額を
149)。

昼田楽が終わって時間があつたので、大祈禱の赤飯を持って田峯の散歩をした。
ところどころに雪が残っている。田峯城は、集落全体を見渡せる丘の上であり、今日
では木造の砦が復元されている。集落に戻り、また別の方へ登っていくと、畑や茶畑
の向こうに小さな石の厨子があつた。ここが今泉道善の首を切り落とした場所であ
る。更に集落の一番高いところで、作手街道の山道に入っていくと、「首塚地藏尊」
と書かれた札が無数に並び、やがて石塔や石
佛などがまとまっているところがある。これ
は、殺された城内の 96 人の首塚で、かつて
ここに首が晒されたのだという。

「夜田楽」はまだ明るい 16 時過ぎから始
まった。場所は本堂内に移っている。この夜
田楽の内容は田遊で、山中八幡宮のデندن
ガッサリ、財賀寺などの御田植祭とも共通性



図 150 佛前での夜田楽(平成 26 年 2 月
11 日)



図 151 朝田楽(平成 26 年 2 月 11 日)

が多く、
中央に置

かれた太鼓及び菰を田圃に見立てて、その周
りで踊って稲作を表現する。黄金の佛像の前
で、禰宜、羽織、鳥追い、笛吹きが中心とな
って舞や唱え事を披露し、粃を蒔く。円盤状
の「べらべら餅」を檜棒で挟んだものが 2 つ
登場し、収穫物を表現している。夜食とし
て、黄な粉をまぶしたおはぎやべらべら餅が
振る舞われる。赤い衣装の羽織が、佛前
で田の神を祀り、厳かに

祭文を読み上げる。青い衣装の鳥追いが、
鼓を打ちつつ大きな声で鳥追い歌を披露
する(図 150)。



図 152 男根を持つ舞人（平成 26 年 2 月 11 日）

「朝田楽」（「庭の事」）は、「夜田楽」に引き続き、田楽衆が本堂前・舞台前の竹製屋根の下に移って行われる。昭和 20 年代まで、この朝田楽は 3 時から行われ、夜が白む頃に終わっていたが、現在では夜田楽と朝田楽との中休みを大幅に短縮して、朝田楽を 23 時までには終わらせてしまう。竹製屋根の下では、四箇所で焚火がされ、その周辺で田楽衆が舞う。途中で田楽衆が焚火に挑みかかり、それを蹴散らすような動作が繰り返される（図 151）。また舞人は、ここでも男根を持っている（図 152）。宿泊先の都合で、21 時過ぎにはタクシーで引き揚げた。行事はそれまでにはおおむね終わっていた（『設楽町誌 教育・文化篇』、山本宏務『奥三河のまつり 3 田峯田楽と地狂言』、現地配布資料を参考にした、「田峯田楽公演上の参考資料」（北設楽郡設楽町公式サイト内）、北設楽郡設楽町公式サイトを参考にした）。

34. 田峰観音奉納歌舞伎（2 月 12 日）

田峯の地芝居（農村歌舞伎）は、田峯田楽の翌日に田峯観音と同じ場所で行われる。奥三河の各地には見事な農村舞台があり、今日でも幾つかの場所で農村歌舞伎が保存されているが、田峯歌舞伎の舞台はその最たるものである。この田峯歌舞伎の由来として、次のような逸話がある。田峯城主菅沼定信が再建し篤く帰依した日光寺が、正保元年（西暦 1644 年）に焼失してしまった。田峯の村人たちは日光寺を再建しようと、段戸山の木を伐採し、承応 3 年（西暦 1654 年）に新しい日光寺が完成した。ところが再建資材のなかに幕府直轄の御林で盗伐した材木があると、代官の耳に入ってしまった。御林検分に東海道赤坂宿の代官所から役人がやってくるようになったが、盗



図 154 当日の舞台（平成 26 年 2 月 12 日）

伐の重罪を科せられる危機に直面した村人たちは、田峯観音に一心に祈



図 153 前日の舞台（平成 26 年 2 月 11 日）

り、この危機を克服できたならば、村が三軒になるまで毎年歌舞伎を奉納し続けると約束した。果たして検分の役人が来ると、この地

域に雪が降り、切株の有無を調べることができなくなった。証拠をつかめなかった役人は、お咎めなしとの沙汰を下した。このため村人は、今日まで感謝を込めて毎年田峯観音に歌舞伎を奉納し、昭和の大戦中も途絶えることがなかったという。



図 155 三番叟 (平成 27 年 2 月 12 日)

昨日の朝田楽の舞台だった竹製屋根の下は、この日は観客席になっている。昨日の竹製屋根は網目状だったが、今日はその上から厚い覆いがかかけられ、内部は真暗になっている。内部には、この歌舞伎のために献金した奉納者の名前が書かれた毛筆の紙が多く張られている (図 153・154)。演者だけでなく、義太夫や三味線もいる。演目は、毎年まず黒金の烏帽子をかぶっての三番叟から始まり (図 155)、そのあと短時間のものが3つほど上演される。演じる者も見る者も仲間なので、演技中にも声がかかり、お捻りが乱れ飛び、どっと笑い声が沸くのである。外には幟が立ち、露店が並んで、賑やかな有様であった (図 156) (北設楽郡設楽町公式サイト、山本宏務『奥三河のまつり 3 田峯田楽と地狂言』、現地説明版を参考にした)。

35. 鳥羽大篝火 (2月第2日曜日)



図 157 鳥羽駅 (平成 26 年 2 月 12 日)

神明社で 2 月第 2 日曜日 (本来は旧暦 1 月 7



図 159 鳥羽神明社 (平成 26 年 2 月 12 日)

鳥羽は幡豆郡幡豆

町に属した海沿いの集落である。幡豆町は平成 23 年に西尾市に併合されたが、茶畑が広がる平地の西尾とは、大いに雰囲気異なっている。この鳥羽にある「鳥羽神明社」は、平城天皇の大同年間 (西暦 806 年-810 年) に創建されたという古い神社である。かつてはこの地に神宮寺があったといい、「鳥羽廢寺」と呼ばれている。

この鳥羽

日)に行われるのが「鳥羽大篝火」(とばおおかがりび)で、鳥羽の火祭とも呼ばれている。この祭礼の起源は、史料などが焼失したため不明だが、社伝によると約千二百



図 156 舞台前の幟と露店 (平成 26 年 2 月 12 日)



図 158 神明社への道 (平成 26 年 2 月 12 日)

年の歴史があるという。この祭礼では、前日にすずみを2基作成し、これを境内に設置する。このすずみとは、「神木」（栃の木）を茅で包み、それを青竹60本（閏年には61本）で囲み、藤（上から（6月を表す）「一の藤」、（12月を表す）「二



図 160 すずみ（平成 26 年 2 月 12 日）

の藤）」で巻き上げ、根元に（1年を表す）「十二縄」を巻いた、高さ16尺（約5米）の大松明である。神明社の西にある宮西川（鳥羽西川）を境に地区を東西に分け、西を福地、東を乾地と呼び、それぞれから25歳の厄男である「神男」（しんおとこ）を選ぶ。神男



図 161 鳥羽神明社（平成 26 年 2 月 12 日）

は祭礼前の3日間（かつては7日間）、神社に籠り朝晩に水垢離をとり、別火生活をして身を清める。祭礼当日、夕方に神事のあとでこれに火を放つ。それぞれの地区の神男及び奉仕者が燃えさかるすずみを揺さぶり、急いで神木を取り出そうと競争する。言い伝えによれば、福地が勝てば山間部に豊作が恵まれ、一般に雨が多く、乾地が勝てば干天が続いたり異変が起きたりすると伝えられる。一方が勝利すると良いことづくめ、他方が勝つと悪いことづくめ、となっているのは、不思議である。福地と乾地との歴史的関係が表現されているのかもしれない。

三河鳥羽駅には14時50分に着いた。蒲郡から名鉄蒲郡線に乗ると、西浦温泉など海沿いの田舎の風情を楽しむことができる。吉良吉田駅



図 163 海岸での禊（平成 26 年 2 月 12 日）

の1つ前の三河鳥羽駅は農村ののどかな駅で、駅前に大きな火祭の看板が出ている（図157）。鳥羽駐在所の横を通



図 162 海岸への行列（平成 26 年 2 月 12 日）

り、木造家屋が目につく集落のなかを進んでいく。すると田圃の向こうに白い幟旗が一对立っているのが見えた。やがて幟旗が林立しているところが見えてきて、石鳥居の横に「村社 神明社」の社標が立っていた

(図 158・159)。境内は山際で、社殿は高いところにある。参道の途中、森のなかに入ると、右手にすずみが2基設置された広場が現れた。すずみは、上部に「飾り茅」と称してすすきが飾られており、更にそこに御幣が一基に月2つずつ突き刺さっている。地面にやや穴を掘り、そこに固定してあるが、穴が浅いため、これだけではすずみは倒れる(図 160)。このため、すずみには四方八方から縄が伸び、各方面から支えている。社殿は、更にその奥にあった。瓦葺の拝殿の向こうに、小さな本



図 164 味噌汁の振舞 (平成 26 年 2 月 12 日)

殿、東殿、西殿があるが、それは見えない(図 161)。すると社務所周辺には、鉢巻、白足袋に白い晒を巻いた祭礼奉仕の裸男たちが集まっている。30代、40代と見えた。15時になると、合計100人ほどの裸男たちは、4人ずつ肩を組み、大挙して境内を出て、三河鳥羽駅横の踏切を渡り、禊をするために海岸に向かった。先頭は、竿の先につけた提燈を従えた2人の白装束の神職である。このうち1人が、「額当」(黒い鉢巻上のもの)を付けた女性神職だった(図 162)。海岸に着くと、この神職たちが塩や切麻(きりぬさ:紙吹雪)を播いて修祓をした。これが終わると、男たちが海に入っていく、首まで海に浸かって禊をした(図 163)。やがて戻ってきた彼らは、浜辺の焚火で迎えられた。やがて一行は神社に戻った。この際、途中の三河鳥羽駅前では、地元の人々による「あさりのみそ汁」の振舞があった(図 164)。

16時20分頃、境内に戻った。山火事を予防するために、消防団が森の木々に水をかけている。拝殿のなかを覗くと、多くの鏡餅が供えられていた。境内の一角には、昭和20年以降(平成元年は昭和天皇の諒闇のため自粛)の神男の一覧表が誇らしげ



図 165 燃え盛るすずみ (平成 26 年 2 月 12 日)

に掲げてある。それを見て分かるのが、「福地」は崎山、姫山、十三新田、足ヶ谷、迎から、「乾地」は川坂、迫、里、林、崎山、荒井から、神男が選ばれているということだった。

18時過ぎになると、奉仕者たちが白黒の斑の装束で境内に集まってきた。これは魔除のために幟の布地を着物にしたもので、全身を覆っている。この着物を着て、水を被り、燃え盛るすずみにとびかかるのだが、彼らを「ネコ」という。19時になると火を灯した提燈を持った人々もやってきた。

一同は拝殿で神事を済ませ、19時40分過ぎに竿の先に付けた提燈を先頭に、一行がすずみの前にやってきた。拍子木が打たれ、宮司、火打ち、塩まき、神男2人、「アテ棒」（火を消すときに使う餅の木）担当者2人、「払い棒」（桜の枝を箒のようにまとめた、火の粉を払う棒）担当者2人、福地と乾地の奉仕者12人ずつ、その他奉仕者数12人が、行列を構成する。ここでもまた神事が行われる。そして火が起こされ、それが「ゆすり棒」（黒松の棒）の先のすずきに移され、やがて「飾り茅」に点火される。20時少し前である。火はめらめらとあつという間に燃え広がり、赤く美しい炎が起こる（図165）。2割くらい燃え、「一の藤」あたりまで燃えてくると、太鼓の合図で「一の棒」を入れてすずみを揺する。「ネコ」たちの着物は、煤で真黒になっている。半分くらい燃え、「二の藤」あたりまで燃えてくると、太鼓の合図で「ゆすり棒」を入れる。7割くらい燃えたところで「三の棒」を入れてすずみを一気に解体し、なかの神木を取り出して、拝殿まで引き摺って行って奉納する。点火してから十数分で神木が出てくる。神木は幹も枝もある大きなものだった（図166）。だが燃え盛るすずみを解体するのは難しい。この間、煙が多ければその年の雨が多く、竹が爆ぜる音が大きければ雷が多いと言われる。また燃え残りの竹で箸を作れば、歯の病になりにくいというが、神事が終わっても、すずみの残りは燃え続け、取りに行くのは難しそうだった。20時22分に境内をあとにした（『幡豆町史 本文編3』、現地説明版を参考にした）。



図166 取り出された神木（平成26年2月12日）

36. 菟足神社の御田祭（旧暦1月7日）

宝飯郡小坂井町は豊橋郊外にあった。この地には貝塚があり、銅鐸なども発掘されているため、古くから人々が住んでいたと見られている。江戸時代には、この地は「小坂井宿」と呼ばれ、信州街道と平坂街道とが交差し、今日では東海道新幹線が通過して、交通の要所となってきた。明治39年に宝飯郡の豊秋村と伊奈村とが合併して宝飯郡小坂井村となり、大正15年に宝飯郡小坂井町となったが、平成22年に豊川市に併合されている。

菟足神社（うたりじんじや）は、小坂井町にある「式内社」、つまり10世紀前半の『延喜式神明帳』に記載のある神社である。菟足神社の創建は7世紀末といわれ、祭神は雄略天皇の時代に「穗国造」だった菟上足尼命（うなかみすくねのみこと）である。菟足神社は、古くは平井の柏木の下に鎮座していたが、天武天皇15年（西暦686年）に小坂井の丘の上に遷座したと伝えられる。平安時代初期、朝廷は諸国の神社に神階を与えて編成していったが、三河では知立神社や砥鹿神社などに続いて、貞観6年（西暦864年）に菟足神社が正六位上から従五位下に昇格になったと、『三代實録』には記載がある。神佛習合の時代には、菟足神社は正三位「菟足大明神」と呼ばれるようになった。応安3年（西暦1370年）には梵鐘が鑄造され、県の有形文化財に指定されている。江戸時代には、菟足神社は95石の朱印地を有し、

宝飯郡では砥鹿神社に次ぐ格を誇り、佛教面では財賀寺と関係が深かった。菟足神社所蔵の『大般若經』585巻は、いま国の重要文化財になっているが、江戸時代にはこれを財賀寺から来た僧侶が転読していたという。だが明治初年の神佛分離で、菟足神社から佛教的要素が排除されて、いまに至っている（『小坂井町史 通史編』）。

菟足神社の御田祭（みたまつり）は、前述の「デンデンガッサリ」（山中八幡宮）や「禳田祭」（財賀寺）などと同様に、田遊の一種である。田遊は稲作の光景を表現した神事で、東三河では拝殿内に置いた太鼓を田圃に見立てて、その周辺で舞踊や歌謡を披露することが多い。菟足神社の御田祭の起源は不明だが、元禄14年（西暦1701年）正月調製との記載がある「昼食持ち」の装束が保存されているといい、それ以前に遡るものと見られている。

すっかり暗くなった頃に飯田線小坂井駅に着いて、18時前に菟足神社の拝殿に入った。内部には、「蓬莱山飾り」と呼ばれるものが用意されている。これは2米以上の松（三段松）を中心とし、4本の青竹で囲って注連縄を張った結界で、松の根本には「牛の舌餅」と呼ばれる小判餅（36枚とも48枚ともいう）が積み重なっている。



図167 川出清彦の肖像写真（平成28年2月14日）

ほかにも、後述の「風祭」関係の額や写真、「金婚式」や「卒寿」などを祝って氏子が奉納した額、「美明志」（みあかし）、「氏子安全」と書かれた小田原提燈が、拝殿内に掲げられている。

拝殿内に、「故 正四位勲三等 川出清彦 昭和六十二年六月二十七日」と書かれた、黒い束帯姿の神職の肖像写真が掲げられている（図167）。川出家は、菟足神社の社司（神主）を出してきた家門である。戦国時代の神主川出良政

は、天文14年（西暦1545年）の棟札には「禰宜藤原良正」と、元亀元年（西暦1570年）の棟札には「神主宮内大輔良政」と書かれている。近代の川出家は、川出るい、川出直吉、川出綱吉のような歌人を出し、川出裁縫女学校を設立し、小坂井三等郵便局長を務めるなど、地域社会の中心的存在であった（『小坂井町史 通史編』）。川出清彦もまた同家の出身で、掌典（宮中賢所で奉仕する神職）となって昭和の御大典で奉仕し、また神道学者ともなった。川出は、宮内省に出仕したのち、母校の官立神宮皇學館大學（伊勢）で教授となり、敗戦後改めて賢所で奉仕し、掌典職祭事課長を務めた。川出の神道学研究には、神道原論及び宮中祭祀に関するものがある。川出は、昭和20年より県社菟足神社社司を兼務し、更に故郷の多くの神社の宮司を務めた（川出清彦『祭祀概説』、同『大嘗祭と宮中のまつり』など）。

酉の刻、つまり 18 時、闇のなかから「社務所」の提燈を先頭に、年配男性たちの行列が鳥居をくぐって境内に入った。提燈を持つ人物は背広だが、その後ろに狩衣姿で笏を持つ人物が 2 人おり、青い狩衣の禰宜は「作大将」（つくりだいし



図 169 祝詞奏上（左端に蓬萊山飾り）（平成 28 年 2 月 14 日）

ょう）と呼ばれる。そして更に 6 人が続いて

いる。そのうち 1 人は女装しており、「昼食持ち」（ひるまもち）と呼ばれる。残りは着流しに羽織を重ねており、「作男」と呼ばれる。この羽織は雷紋（稲妻紋）のような意匠のもので、あるいはこの地域の文化の中国的起源を伝えるものなのかもしれない。一同は

拝殿に入ると、奥の幣殿まで進んで、立って整列し、開扉献饌して神事の開始を告げた（図 168）。

18 時 7 分、一同は作大将を先頭に拝殿に戻って整列した。狩衣姿のもう 1 人の人物だけは、「蓬萊山飾り」の前に座っている。荒薦の上には太鼓が、鼓面を上にして乗せられている。その鼓面の上には、「田地餅」（大鏡餅）が乗せられている。作大将は、「オサギ」という 120 糎の柳の枝の先端に三角形の紙を挟んだ祭具を掲げている。一同は全員で祝詞を奏上し始めた。「掛麻久母畏伎菟足大神乃大前尙謹志美敬比恐美恐美母日佐久平成二十八年申歳正月七日酉乃刻乎以底天乃下平介久安介久奥津御年乎始米五種乃穀乎成志茂穂尔栄志米牟登志底神職諸十二乃衣乎飾利十二乃袖口乎揃開大明神乃御種下

志始米参良世侯也良牟」

（図 169）。

作大将は神意を伺い、田遊の開始を宣言した。昼食持ちはひとり幣殿の神前に戻って座り、田遊は作男たちが行う。作大将は全体の進行役で、各段階で



図 171 昼食持ち（平成 28 年 2 月 14 日）

神意を伺い、始めるよう指示を出す。まずは「田打ちの

唄」である。一同は田地餅に鍬の柄を突き立てながら、「大明神の御田を、千町万町打ち開いて、いでいで見しようよ」などと歌う（図 170）。次いで「粃まき」である。一同は作大将の差し出す三方から粃のようなものを取り、太鼓の周りを回りつつ、「バラリ、バラリ」と言いながら四方八方の畳の上に蒔いて見せた。作大将に促



図 168 行列（平成 28 年 2 月 14 日）



図 170 田打ちの唄（平成 28 年 2 月 14 日）

されて「苗代の鳥追い唄」に移ると、作男たちは唱えた。「すくい喰うは小鳥（こうがらす）、拾い喰うは小雀（こうすずめ）、畔をもつは螻蛄（けえらむし）、中をもつは土亀（どんがめ）よ」。ここでいきなり、参詣者の男性が「ほら持ってけ」と子供に促して、鼓面上の田地餅を奪って逃げさせ、作男が追いかけて餅を取り戻すという光景があった。このように神事を邪魔する参詣者の子供のことを「小雀」といい、祭礼の一部になっている。「苗代の草取り唄」

に続き、「馬の代搔き唄」が行われる。60 糶ほどの柳の枝に直径 15 糶の円盤状の餅を両輪として付けたものを馬の轡を見なし、これを 3 人の作男が押して農耕馬による代搔きを表現し、

「大明神の御種おろし、銭蔵金蔵、三はね跳ねて、跳ねからかせ」と唱える。「代ならし」では、作男たちが柳の枝で畳をなでながら、「べろり、べろり」と言って回る。「苗打ち」では、作男たちが作大将の差し出す三方から苗のように見える松葉を取り「ほーい、ほーい」と言いながら四方八方に投げて、田植えを表現する。ここで作大将は幣殿に戻り、女装の男性を連れてきた。これは「子孕み女」といい、大きな腹をして白い布をかぶり、柳の天秤棒を持っている。この棒には、前の端にへぎ箱の弁当、後の端に瓢箪を吊り下げ、その双方に注連縄が付けてある。この女が作男たちに、昼食として餅を配って歩くのが、「昼食持ち」である。この際、瓢箪に触れると疫病にならないとされ、人々が群がっていく（図 171）。続く「田草取り唄」では、作男たちが太鼓の周りで集まってこう歌う。「あら目出度や、一つ葉さいたや、二つ葉さいたや、三つ葉にこうそは、実もさかよりて、あの田にはえる、この田にはえる稲草（とみくさ）の、種を手に手に摘んで、宮へ持って舞らしよう」。「稲の鳥追い」では、作大将が唱え言葉をしながら、手桶の底を鼓のようにポンポンと打ち鳴らす。「稲刈り」では、「代ならし」と同じような動作をしながら、今度は「さらり、さらり」と言う。このとき、参詣者から「おい、刈り残しがあるぞ」と野次が飛んだ。「稲の数」では、作男たちが「一、十、百、千、万、億、兆」と 3 度数える。このとき参詣者から「違えたぞ、もう 1 回!」「よくできました」などと野次が飛んだ。「稲叢」では、作男の一人が太鼓の上に俯せになり、背中に田地餅を置く。そして一同で「平成二十八年申の歳の稲村乗り上がれ」と唱えるのである。かつては「彌勒十年・・・の歳の稲叢乗り上がれ」と言っていたが、昭和 27 年に名古屋市で県教育委員会主催の古典芸能発表会が催された際に、今日の文面に改められたという。これは神佛分離のようだが、明治初期ではなく昭和中期の実施というのが興味深い。俯せの男が起き上がり、背に乗せた田地餅を持ち上げることで、豊作になったことを表現する（図 172）。祭礼は、閉扉で終わりを迎えた。なおこのときは各段階が拝殿内で行われたが、年によっては拝殿を出て、境内を広く用いて、焚火などしながら行われることもあるようである。『愛知縣神社要覽』にも「田祭」は「庭上にて」との記載がある。

拝殿前に列をなしている参詣者たちは、拝殿内の作男たちから撤下品を受け取って、家路に着いた。撤下品は、牛の舌餅、みかん、各種菓子である。かつては牛の舌



図 172 稲叢（平成 28 年 2 月 14 日）

餅の餅投げがあり、参詣者がそれを争って取ったというが、このときはビニール袋による手渡しだった。飯田線で小坂井駅から豊橋駅に戻り、構内の立喰いきしめん屋「壺屋」で、小坂井町に工場のある山本製粉の「ポンポコラーメン」を食べた（祭礼の展開や起源については『小坂井町誌』、「菟足神社 田まつり」（YouTube）を参考にした）。

37. 瀧山寺の鬼祭（旧暦1月7日に近い土曜日）



図 173 吉祥山瀧山寺（平成 26 年 2 月 15 日）

瀧町（たきちょう）は西三河の山間地域にある。三河國額田郡瀧村だったこの地は、額田縣、次いで愛知縣額田郡に属し、明治 22 年に額田郡常磐村の一部となり、昭和 30 年から愛知県岡崎市の一部となっている。現在でも小字として、かつての瀧という地名が生きている。



図 174 瀧山寺本堂（平成 26 年 2 月 15 日）

この瀧町にある吉祥山瀧山寺（たきさんじ）は、天台宗の古刹である（図 173・174）。瀧山寺は吉祥陀羅尼山薬樹王院と号し、薬師如来を本尊とする。『瀧山寺縁起』によれば、朱鳥元年（686 年）に役小角が青木川の滝壺から薬師如来を拾い上げたのに始まる。役小角は自ら薬師如来像を彫り、その佛身に金色の薬師如来を納め、「吉祥寺」と称する一堂を建立して安置した



図 176 日吉山王社（平成 26 年 2 月 15 日）

ともいう。この「吉祥寺」は一旦荒廃するが、保延年間（西暦 1135 年-1141 年）、比叡山で修行した佛泉上人永救（ぶっせんしょうにんえいぐ）がこの地にやってくる、吉祥寺跡に地元流石の物部氏の庇護を得て、本堂を造営した。やがて境内には 360 もの堂宇が建立され、官府の命により寺名を「瀧山寺」と改めた。その後物部氏に替わり熱田大宮司家が大壇那となったが、瀧山寺の僧侶となった熱田大宮司季範夫妻の孫、寛傳上人は源頼朝の従弟であり、頼朝の御歯及び御髪を納めた聖観音菩薩、梵天、帝釋天の三



図 175 瀧山寺東照宮（平成 26 年 2 月 15 日）

尊像を運慶・湛慶父子が手掛けた。のち三河國守護足利氏の崇敬も受けたが、室町時代後期には戦乱で衰退した。江戸時代に入り、天海僧正の命で住職となった亮盛上人は、三代将軍徳川家光に見出され、寛永18年（西暦1641年）に家光により朱印地を拝領する。正保3年（西暦1646年）には、家康誕生地を守護する瀧山寺の隣地に、東照宮が建立された（図175）。江戸時代には青龍院、玉泉院、常心院、淨蓮院、觀量院、密嚴院の6坊があったが、明治初期にその多くが廃されて、現在では淨蓮院のみが瀧山寺本坊として残っている。この頃神佛分離も行われ、瀧山寺本堂の右横にある瀧山東照宮は現在でも別法人である。なお瀧山寺本堂の後ろには、佛泉が勧請した天臺宗ゆかりの日吉山王社もある。これは横幅が広い神社だが、現在は社殿の痛みが激しく、トタンの覆堂で保護されて、全容を見ることができない（図176）。

この瀧山寺で、2月中旬の土曜日に**鬼祭**が行われる。この祭礼は、天下泰平や五穀豊穰を祈って、旧暦正月7日に、本堂の軒下を大松明を持った男たちが、鬼面を付けた3人と共に巡るといふ勇壮なもので、かつては「修正會鬼祭」といった。それは鎌倉時代以来の祭礼だが、室町時代に一旦廃絶したという。徳川家康の出身地に近いため、瀧山寺の鬼祭は家光の時代に復活して江戸幕府の行事となり、役人が派遣された。神佛分離で瀧山寺は寺領を没収され、僧侶30余名は悉く還俗して衰退し、鬼祭も明治6年から同20年まで再び中断を余儀なくされ、再開後は滝村の人たちが祭礼を担ってきた。現在滝町には9つの組があり、祭礼の保存・運営に当たっている。

滝町への道は名鉄東岡崎駅から始まる。名鉄バスで瀧山寺下の停留所まで行くのが一番楽である。東岡崎駅から出るバスは多いが、瀧山寺下を通るバスは少ないので、滝団地行きバスで滝団地口まで行き、そこから歩くこ



図178 大樹寺三門・総門を通して岡崎城天守を望む
(平成30年2月17日)

とも可能である。鬼祭の日には臨時バスも出るが、これは17時以降の祭礼を見学するためのもので、その全容を見るためには、昼過ぎに行く必要がある。



図177 成道山大樹寺三門（平成30年2月17日）



図179 瀧山寺三門（平成26年2月15日）

瀧山寺に行く途上に**大樹寺**（だいじゅうじ）がある。東岡崎駅から出る名鉄バスの多くは、この大樹寺の横を通過する。成道山松安院大樹寺は、徳川家康と縁が深い寺院である。応仁・文明年間（西暦 1467 年－1487 年）に松平親忠が安城松平氏の菩提寺として建立し、松平清忠が再興したこの寺は、開基当初から「大樹」（征夷大將軍の唐名）寺という名前で、徳川氏の興隆を予言することとなった。寺伝によると、桶狭間での今川義元の敗死後、僅かな手勢を連れて尾張から逃げ帰った部将松平元康（のちの徳川家康）は、大樹寺に籠ったが織田勢に囲まれ、先祖の墓前で自害しようとした。ところが、元康を第 13 代住職登譽天室が諫め、「厭離穢土欣求淨土」とい



図 180 瀧山寺の門前町（平成 26 年 2 月 15 日）

う淨土宗の言葉を与え、生き延びて太平の世を築くよう諭した。元康は、寺僧らと奮戦して追手を撃退し、のちこの言葉を旗印としたという。江戸時代になると、大樹寺は徳川氏から崇敬を受け、壮麗な堂宇も建立され、徳川慶喜を除く歴代宗家の「等身大」の位牌が納められた。大樹寺は壮麗な三門を有し、その正面に総門があるが、現在では三門と総門との間に岡崎市立大樹寺小学校があり、校庭によって参道は分断されている（図 177

1）。とはいえ徳川家光の整備により、本堂から三門、総門を通してみると、岡崎城天守（明治に破却、昭和 30 年代に再建）を遠望できる配置になっており、ある意味小学校の校庭があって宅地化を防いでいるために、この展望（ビスタライン）は今日なお岡崎の名物となっている（図 178）。大樹寺付近から下山村に至る大沼街道が始まり、これを進んで瀧山寺に向かった。

青木川に掛かる橋を渡ると、瀧山寺の三門（仁王門）が見えてくる（図 179）。檜皮葺で朱塗の壮麗な三門は文永年間（西暦 1264 年－1275 年）の建立で、岡崎市内で最古の木造建築である。その傍らには、正面右に「従是東瀧山御神領」の標識が立ち、正面左に「飛彈權守藤原光延墓」なる塚がある。藤原光延は、この三門の建築を担当したが、垂木を 1



図 181 ガラ紡機跡（平成 26 年 2 月 15 日）

本逆に取り付けてしまったため、これを恥じて自殺したと伝えられている。この日は三門の脇



図 182 十二人衆御宿（平成 26 年 2 月 15 日）

に大松明が二つ置いてある。三門から青木川沿いを遡っていくと、趣のある門前町が続いている

（図 180）。この青木川は矢作川の一支流だが、滝町の現地説明版によると、ここにはかつて水車小屋が並んでいた。水車は江戸時代

には搾油・精米用だったというが、明治時代からガラ紡機の動力となった。昭和初期には27機が稼働していたというが、大正末年から電力に押され、伊勢湾台風で打撃を受けて、現在では堰堤が残るのみとなっている（図181）。



図183 三門を出発した行列（平成26年2月15日）

「瀧山東照宮」の社標のところに案内図があり、そこから石段を上がっていくと、本堂が見えてきた。檜皮葺で白木の本堂は簡素だが、左右に広がって威厳があり、富貴寺大堂を思わせる。この日は、屋根や境内に雪が残っていた。13時半過ぎに現地に到着すると、本堂の前庭には特大松明が2本置かれ、本堂前には木の舞台が設けられている。本堂の周囲には、水が満々と入った大きな木の桶が幾つも置いてある。祭事奉仕者たちが、

火のついていない大松明を抱え、軒先を回っている。

しばらく三門付近を散歩した。滝団地口の停留所付近まで戻り、団地には入らずに付近を回った。途中に瀧山寺鬼祭の「十二人衆御宿」と書かれたプレハブ小屋（成

瀬建設の旧事務所）がある（図182）。出入りしている装束の男性に尋ねると、祭礼で中心的役割を果たす人々専用の小屋であるという。「十二人衆」とは、祭事を中心を担う滝村十二谷の代表者であり、全員男性である。かつては世襲だったが、これは



図184 運ばれる大松明（平成26年2月15日）

弛緩する傾向にある。精進潔斎も簡略化しつつあるが、現在もこの「御宿」で合計3食が共食される。



図185 行列が撒いた丹切飴（平成26年2月15日）

15 時前、三門に祭事参加者が集まった。行列を組んで大松明 2 つを寺まで運び込むのである（図 183）。先頭は「進行」の提燈を持つ男で、白装束の男たちに担がれた大松明が 2 つ続き、「大役」の提燈を持つ二本差しの責任者が続き、十二人衆が続く。十二人衆は鍬を担いだり、太鼓を叩いたり、法螺貝を吹いたりする。行列の最後は、赤い傘を差し掛けられた住職である。この行列は、木遣のような「瀧山寺鬼まつりの唄」を合唱しながら、三門から青木川沿いを瀧山寺まで練り歩いていく（図



図 186 瀧山寺本坊に着いた行列（平成 26 年 2 月 15 日）



図 187 瀧山寺の精進料理（平成 30 年 2 月 17 日）

184)。「一、見たかなァ 聞いたかヨー 五穀の祈り ヤレヤレー 今もなァ 輝くヨー 鬼まつりよ ホラホイ ホラホイ ホラホイ 二、滝のなァ 仁王門ヨー いつ来て見てもな ヤレヤレー 逆さなァ 垂木はヨー まだ知らぬよ ホラホイ ホラホイ ホラホイ 三、めでたなァ めでたのヨー 若松様はよ ヤレヤレー 江田もなァ 栄えてヨー 葉も茂るよ ホラホイ ホラホイ ホラホイ 四、滝もなァ 開けたヨー 滝壺淵はよ ヤレヤレー 薬師なァ 如来のヨー 御出ましたよ ホラホイ ホラホイ ホラホイ 五、親はなァ 無くともヨー 子は育つよ ヤレヤレー 祖父となァ 祖母とのヨー 愛の孫はよ ホラホイ ホラホイ ホラホイ 六、お前なァ 百までヨー わしゃ九十九までよ ヤレヤレー 共になァ 白髪 of ヨー 生えるまでよ ホラホイ ホラホイ ホラホイ 七、薬師なァ 如来とヨー 山王様はよ ヤレヤレー 八百なァ 余年のヨー かが高いよ ホラホイ ホラホイ ホラホイ」行列は練り歩きながら、沿道の人々に丹切飴を振舞っていく（図 185）。

行列はやがて瀧山寺本坊に入ってしまった（図 186）。この本坊で一行は鎌倉時代から伝わる瀧山寺特製の精進料理を頂戴する。いまでは一般参観者も事前注文すれば、この由緒ある料理を食することができる。精進料理の献立は以下の通りであった——（お皿）柿酢和え、（お坪）梔子（くちなし）、（お平）飛龍頭（ひりょうず）の煮物、（お猪口）叩き牛蒡、（大引）牛蒡の筏揚げ、菊芋の漬物、（小皿）零余子（むかご） 柚味噌和え。これらがお膳に乗って出てくるが、続いて白米、赤味噌汁、熱燗一合が来る（図 187）。熱燗はお代わりもできた。祭事奉仕者も赤ら顔である。



図 188 本堂前に並んだ十二人衆（平成 26 年 2 月 15 日）



図 189 十二人衆の鐘撞き（平成 26 年 2 月 15 日）

本坊と庭を隔てて向かい合っている宝物館では、運慶、湛慶の佛像などの宝物を見ることが出来る。宝物館の後ろには岡崎市立常磐中学校があり、その生徒たちが手作りの土鈴をお土産に販売している（なお三門付近には岡崎市立常磐小学校がある）。

17 時、祭事奉仕者の一行が行列を組んで境内に入っていた。祭礼の開始である。太鼓を鳴らし、法螺貝を吹いて、一行は石段を上がり、本堂前の庭に整列した（図 188）。十二人衆は、鐘楼に行き

鐘を撞く（図 189）。この鐘は徳川家光奉納のもので、昭和の戦争でも供出を免れたという。

17 時より佛前供養が始まった。この供養は、僧侶たちに



図 191 本堂に用意された松明（平成 26 年 2 月 15 日）

よって本堂内で長く続いたが、外部から様子を窺い知ることにはできない。この間本堂前では、司会者がマイクで参詣者に祭礼の内容を繰り返し説明した。また本堂に脇から入って内部を参観し、そこに



図 190 複製の鬼面（平成 26 年 2 月 15 日）

安置されている鬼面三

つを見ることができた（図 190）。但しこの鬼面は複製

で、本物は佛前に供えられているのだという。鬼面は大きなもので、これを付ける冠

面者は、鼻の穴から辛うじて地面が見える程度であるため、祭礼では介添役 2 人が腕

をとって移動を助けるのだと説明があった。冠

面者は名誉な役柄とされ、現在では厄年の男性及び中学生の男児から希望者を募っている。またこの本堂見学の際に火祭で用いる松明も持たせてもらった。松明は背丈よりも大きい

が、重さはそれほどではなかった。ただ火をつけた状態で本堂を回るのは習練が必要である（図 191）。

18 時 20 分より長刀御礼振りが行われた。十二人衆が日吉山王社、瀧山東照宮の前に整列し、祭礼開催の御礼に長刀を振りながら舞った。長

刀を振るのは 2 人で、東次郎、西次郎という。そののち、2 人は本堂前でも御礼振りを



図 192 日吉山王社前での長刀御礼振り（平成 26 年 2 月 15 日）

18時30分から本堂前で鬼塚供養が行われた。鬼塚とは松を植えた本堂前の小さな塚である。この塚にはいわれがある。それは鬼面が祖父面（じじめん）、祖母面（ばばめん）、孫面の3つしかなく、父面、母面がないという点に関して



図 194 2つの大松明（平成 26 年 2 月 15 日）

である。寺伝によると、あるときこの鬼祭で、奥三河鳳来寺から来た山伏と称する旅僧が2人奉仕した。当時、鬼面を被る冠面者は、



図 193 庭祭（平成 26 年 2 月 15 日）

1週間斎戒沐浴し、別室で起居し、炊事など生活の全てを男の手で行うことが決められていた。ところが彼ら山伏は、自分たちは普段から修行して身の穢れがないから

とあって、この手続きを踏まずに父面、母面を付けて祭礼に奉仕した。果たして祭礼後、2人は面を外そうと思っても取れず、遂にそのまま息絶えてしまった。2人は鬼面を付けたまま葬られたので、肉付き面となった父面、母面は、いまもないままなのだという。ちなみに2人は死ぬ前に、毎年鬼祭の際に五穀の種を播き、芽が出たら塚を掘り返してほしいと遺言した。だが毎年の鬼塚供養では、読経と共に五穀の炒った種が播かれるという。これは芽が



図 195 火祭（平成 26 年 2 月 15 日）

出ないようにする工夫だと思われる。ということは、死にゆく山伏たちは復活のための手順を村人に頼んだのに、村人は山伏たちの復活を恐れてか、それを敢えて行わないで供養するに留めているということになる。そういえば「瀧山寺鬼まつりの唄」にも、「親はなァ 無くともヨー 子は育つよ ヤレヤレー 祖父となァ 祖母とのヨー 愛の孫はよ」という部分があった。

19時、庭祭（田遊祭：でんゆうさい）が始まった。この部分は稲作の光景を表現したもので、明らかに田楽、田遊との共通性があるが、ここでは「でんゆう」と音読みにする。侍烏帽子を付けた赤い装束の男2人（コボツネと福太郎）が鍬を担いで登場し、僧と言葉をかけあいながら稲作を表現するのである（図 193・194）。

庭祭に続いて、東次郎、西次郎による長刀振りが行われる。2人目の西次郎が長刀振りを終え、石突で舞台をドンと叩くと、各所の電気が一斉に落とされ、境内の大松明以外は明かりが消える。19時45分、火祭の開始である。

漆黒の闇となった瞬間、突然錫杖や鐘がシャクシャク、ガンガンと鳴らされ、本堂の裏で準備していた大勢の男たちが、火の着いた松明を持って縁側を右回りに回ってきた。東大寺二月堂のお水取りのようだが、松明で欄干の上をこするように来るので、勇壮である。先頭の2人ほどは全身赤い装束で、それ以外は白い装束である（図195）。その人々のなかに、赤い装束を身に付けた鬼が3匹いる。鬼たちは鏡餅のような大きな白餅を持っている。孫鬼は回ってくるたび



図196 孫鬼の擬宝珠立ち（平成26年2月15日）

に、介添2人によって欄干の擬宝珠の上に担ぎ上げられた（図196）。

この火祭は数分間続き、一行は本堂を数回回ったが、やがて一瞬にして終わった。相図と共に、欄干の前に置いてある水の入った巨大な木桶に、皆が一斉に松明を放り込んだのである。本堂前の2つの大松明にも水が掛けられた。この大松明の燃えさしは参詣客にとって無病息災の御守となる。人々は正面の石段を下りて、臨時バスなどで帰宅していった。終了は20時過ぎであった（岡崎市教育委員会『瀧山寺鬼祭り民俗文化財調査報告書』などを参考にした）。

（このはじめ／愛知県立大学外国語学部ヨーロッパ学科ドイツ語圏専攻教授）